長野県下高井郡山ノ内町夜間瀬

伊勢宮

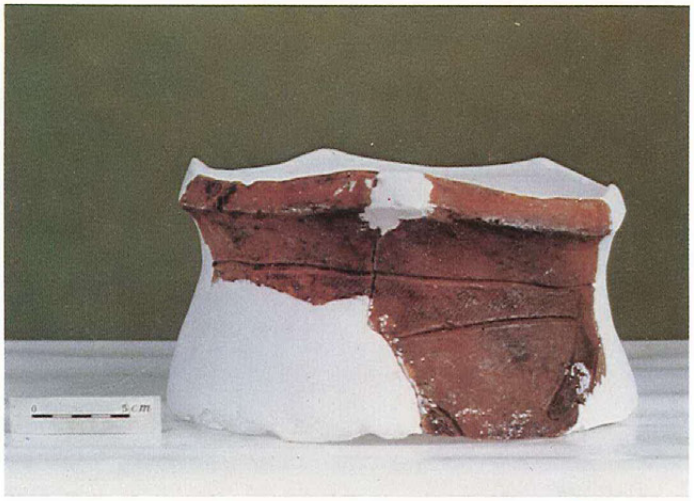
1981

山ノ内町教育委員会

△柄鏡形敷石住居跡 第1号

△縄文式土器

▽縄文式土器



△縄文式土器

▽縄文式土器

長野県下高井郡山ノ内町夜間瀬

伊勢宮

1981

山ノ内町教育委員会

序

伊勢宮遺跡は私たち郷土の歴史を解明するという大きな仕事の中で大変重要な役割をはたしており、山ノ内町夜間瀬本郷地区内の土地改良事業を推進するにあたり発掘調査を実施した次第です。

調査責任者村上富吉氏、顧問金井喜久一郎氏、金井汲次氏、調査指導長峰光一氏、関孝一氏、団長田川幸生氏をはじめ地元区役員、土地改良事業関係者、考古学研究の方々等多大な御協力を得て、昭和53年秋から昭和54年５月までに、約 3,000㎡を発掘し出土品遺物は40,000点をこえました。

今回の発掘のなかで特に注目されたことは、関東・中部地方に特色をもつ柄鏡形敷石住居址を検出したことであり、研磨された敷石部のほかに炉趾、柱穴、縁石、周壁等をそなえており完全な形で出土したものである。これは全国発見例の北限ともいわれております。

佐野遺跡とならび誠に貴重な資料が出土し古代の未知分野に対する関心も高まったわけであります。

今回の発掘調査に協力をいただきました多くの関係者に心から感謝を申し上げるとともに、田川幸生団長ほかの努力で立派な報告書が刊行されましたことに対して厚く御礼申し上げます。

この報告書がふるさとの歴史を知るうえで活用されることを心から念願いたします。

昭和56年３月10日

山ノ内町教育委員会

教育長　田　中　　満

伊勢宮遺跡発掘によせて

昭和53年度より山ノ内町夜間瀬本郷地区が補助事業として計画した夜間瀬南部地区再編農業構造改善事業計画がたてられた。この計画は水田利用再編対策推進のため、未整備水田の区画整理にあわせて一部わい化りんご園に転換造成すると共に集落環境の整備等を総合的に実施し、農業生産性及び集落機能の向上を目的とした事業であった。しかしこの地区内に遺跡地として伊勢宮遺跡が含まれており、発掘調査について町農政課と町教育委員会が現地調査を行い、地主の承了を得て試掘調査をした。この結果一部より縄文時代の土器が発掘されたため文化庁の許可を得て緊急発掘を実施することになり、役員会を何度も開催し組合員の協力を得て発掘調査をした。この結果が報告書の中で詳細に報告されているが現在は埋めもどされ立派なりんごわい化団地になっている。発掘調査にあたられた田川団長をはじめ、発掘調査団の各位、直接発掘にあたられた組合員の協力に感謝します。

昭和56年３月10日

新農構集団農区本郷地区総合整備組合

組合長　畔　上　　儀

例　言

1　本書は、本郷区圃場整備事業に伴う、山ノ内町夜間瀬伊勢宮遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、山ノ内町教育委員会が調査主体者となり、昭和53年11月・12月の第１次と、昭和54年の３月・４月・５月の第２次の調査をした。

3　発掘調査の遺物の整理は池田実男が、図版の整理は荒井宏が中心になっておこなった。

4　本書の執筆は、田川幸生以下、畔上秀雄・檀原長則・池田実男・山上右八坂口孝雄が分担した。

5　本書の編集は、調査団の田川幸生と、畔上秀雄・檀原長則がその任にあたった。

目　次

序　文

Ⅰ　調査に至る経緯…… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境…… 2

Ⅲ　Ａ地区…… 6

Ⅳ　出土遺物……32

Ⅴ　Ｂ地区……60

Ⅵ　Ｃ地区……64

Ⅶ　まとめ……71

題字「伊勢宮」は山本金太山ノ内町教育委員長
表紙カット　敷石１号住居炉趾出土の縄文式土器
扉　Ａ地区発掘全景

Ⅰ　調査に至る経緯

第１次発掘調査

伊勢宮遺跡緊急発掘調査は、本郷地区圃場整備事業にともなうものである。53年10月16日範囲確認調査を日本考古学会員金井汲次先生により行い44ケ所の試掘穴（１ｍ×１ｍ）を設置し試掘した。この結果伊勢宮2945番地－１（約５ａ）が遺物の濃密包蔵地として確認され工事前に発掘調査を行うことにした。地主である畔上正氏の承諾を得て、53年11月11日より12月にかけて日本考古学会員田川幸生先生を発掘調査担当責任者として発掘調査を行った。敷石住居跡１ケ所を含む多数の土器片、列石遺構等が出土した。気象条件等の関係でいったん打切らざるを得なかった。

第２次発掘調査

54年３月21日より調査を始める。前年度発掘した敷石住居跡及び列石遺構の周辺を中心にグリット(2m×2m)を設置する。作業能率をあげるため、バックホーによる表土はぎを行い、水田、リンゴ園より新しい遺構がでた。次に各発掘現場の経過を明確にするため下記のように名称をつける。

第１現場　もも畑　地主　畔上　　正
第２現場　水　　田　地主　中島友三郎
第３現場　リンゴ畑　地主　畔上　和義

第１現場（A地区）

前年度発掘した場所にグリット（２ｍ×２ｍ）を75ケ所設け、各グリットを発掘調査する。前年度発掘した列石遺構を掘り広げていくうちに、新しい敷石住居柄鏡形敷石遺構が発掘された。前年度発掘した住居趾より規模も大きくすばらしい遺構が発掘された。(敷石周囲が鉄平石で囲まれている。中央に「いろり」があり完成品に近近いカメが発掘された）柄鏡形敷石遺構付近より骨片も多数発見され、石斧、石鏃、土器片(ダンボール箱約50個)を発掘する。

第２現場（B地区）

バックホーにより表土（作工）をはぎ、移植ゴテ、竹ベラで掘り広げていくうちに発掘現場北側より「いろり」跡が発掘された。周囲は８個の石で囲まれ中は２段に落ちこんでいる。周囲の石は赤く焼けており日数がたつうちに風化したり、き裂が入ったり傷みがでてきた。また周囲より柱穴も発掘され人間が住んでいた場所として証拠づけられた。この付近は土器片より判断すると、縄文後期と土師時代の住居趾とみられ周辺より柱穴が多数発掘された。また当時使用したと思われる土器片、石斧、石皿、骨片等日常必要品も多く発掘された。また土偶も発掘され当時の生活がうかがわれる。

第３現場（C地区）

前年度表土（作工）をはぎ石組遺構が発掘されたが降雪等により54年度発掘する。この付近は、大小さまざまな石により遺構ができておりこの中より「いろり」跡とみられるもの１ケ所発掘される。また直径約１ｍの円形の集石遺構が発掘された。

なおこの発掘調査にあたり、各方面からのご協力に対して厚く御礼申し上げます。　　（坂口孝雄）

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1、遺跡の位置

伊勢宮遺跡は、山ノ内町西部地区の夜間瀬本郷にあり、本郷区にて祭祀する伊勢大神宮の社叢東側に極めて接近した、標高約 490m の位置にある。

北に高社山（1350m）の秀峯を望み、東に城山（ 850m ）に続く連山を見る、また西に夜間瀬川を隔て箱山（ 647m ）あり、南は夜間瀬川の氾濫によって生じた扇状地の奥、湯田中温泉郷へ続いている。

遺跡の西南を流れる夜間瀬川は、その源を大沼池に発した横湯川と、横手山に水源をもつ角間川の急流が、島崎地籍で合流、北へ流下して千曲川へ合流している。この川は、中世、近世を通じ重要な水資源のため、周辺農民の間に多くの問題が生じた記録もある。現在も多目的に利用されていることは勿論、縄文時代にも、関係深かったことが、出土する遺物にも知ることができる。

またこの遺跡は、上条扇状地の末端と、高社山のゆるく傾斜した長い裾の末端が、遺跡北を流れる泡貝川を中心に接点になっている。泡貝川は古くから開発された水田の潅漑用水で、流下して夜間瀬川に入る。地形から見てきわめて自然の川であるが、特異の点はこの川を境に、北側には遺跡らしいものが、一つもないのである。

夜間瀬川の氾濫した扇状地には、処々に欠残った大小の土塊がある。それらの場所には遺跡も遺物もなく、広い範囲の伊勢宮遺跡は、氾濫の後の河原石の上に、約30cm程堆積した黒土の底にある。

また、前記遺跡の北にそびゆる高社山の東に、飯盛山（1064m）が並んでおり、その間を昔から「唐箕通」と呼んでいる。その山間から吹き下ろす北風は「山背風」で、遺跡はまさにその通り道である。夜間瀬の住民は晩秋から冬を通しで現在までも悩まされているのである。したがって遺跡はその風道の下に造成されているので、縄文人には厳しい生活条件であったことと思うのである。

2、周辺遺跡

伊勢宮遺跡とは、本郷地区にある遺跡の代表的名称で、西南地続きに、町裏、町、東町等の遺跡がある。これらの遺跡はいずれも同時代のもので、縄文時代早期のものから、弥生時代に至るまで種類において、出土せざるものなき一大遺跡である。

四ツ屋遺跡　四ツ屋地籍をかつては百塚と呼んだ由、明治初期まで二基の古墳があったという。耕作の折りに出土した遺物は、加曽利Eの土器、打石斧、砥石、凹石、石鏃等。

上条遺跡　昭和42・43年と山ノ内教育委員会で発掘した、加曽利E式の完形土器及破片に、47点の打石斧、石鏃が出土した。

上条的場遺跡　県道中野長野原線の西側にある。畑地から縄文前期の土器に、有柄鏃出土。

吉沢遺跡　この遺跡は吉沢部落の東側にある。遺物は加曽利E式土器及打石斧、石鏃等。

上条境遺跡　本郷部落の東南にあり、現在リンゴ畑、農耕の折磨石斧２点の外土器片出土。

和田遺跡　和田とは古語で水たまりの意、和田部落はかつてそのような、地形であったか。遺物は勝坂、加曽利E式の縄文式中期。

城ノ腰遺跡　横倉部落の東、小字城ノ腰にあり。地主の塚田金治郎氏が水田を畑に転換目的で工事中出土。土器は縄文前期の南大原、上原、下島式等で、石器では打石斧、磨石斧、石匙、石鏃等であるが中に珍らしいものとして、黒燿石製の釣針状石器があった。

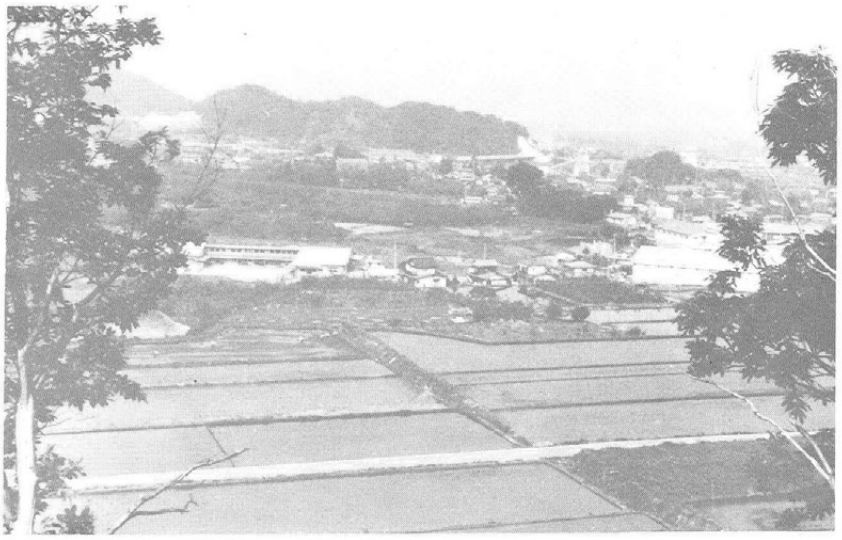
天神森遺跡　横倉区小字天神森にある。遺物は縄文時代の石棒、磨石斧、石鏃等である。

下前坂遺跡　前坂部落は西へ急傾斜した所へ、段状に集落がいとなまれている。部落の下方にあって平坦地に移る所に立地している。遺物は縄文早期末の土器片と、打石斧、石鏃等。

宇木遺跡　小字免山にて宇木部落西方斜面である。縄文前期の有尾式土器片、打石斧、石匙、石鏃等出土している。

横前遺跡　八柱神社の西下、石槍、石鏃、礫石斧、石皿等出土している。

平安時代遺跡　昭和51年５月伊勢宮遺跡の一部を緊急発掘した。その結果縄文中期後半の祭祀遺跡１基が発掘され、それより北20mの場所から初めて、平安時代の竪穴住居跡１基が発掘された。中央に柱穴、南側にカマドの跡があった。　（山上右八）



▷伊勢宮遺跡全景（東方雀山より）
●中央は遺跡中心地
●低い山は紫岩

柄鏡形敷石住居趾　第１号（カラー）

住居趾の円形部は径 3.8m、円形部から張出部までの長さは 6.5m である。円形部は竪穴状をなし、深さは東壁付近で15cm内外である。張出部は壁がなく、全体として周辺より10cmから20cmぐらい低い。

柱穴は敷石部の外周に15個、内部に15個が完全に確認される直前である。そのため、全部は写っていない。柱穴の確認は、黒色の堆積土のため困難をきわめ、雨あがり後の、土壌の水分・土質や土色・土の硬軟等から、総合して検出した。また土坑(1)にはS_1を、土坑(2)にはS_2の蓋石とみられるものを、移動した状態で撮影したものである。以上のことより９頁写真下と、第４図を比較参照されたい。

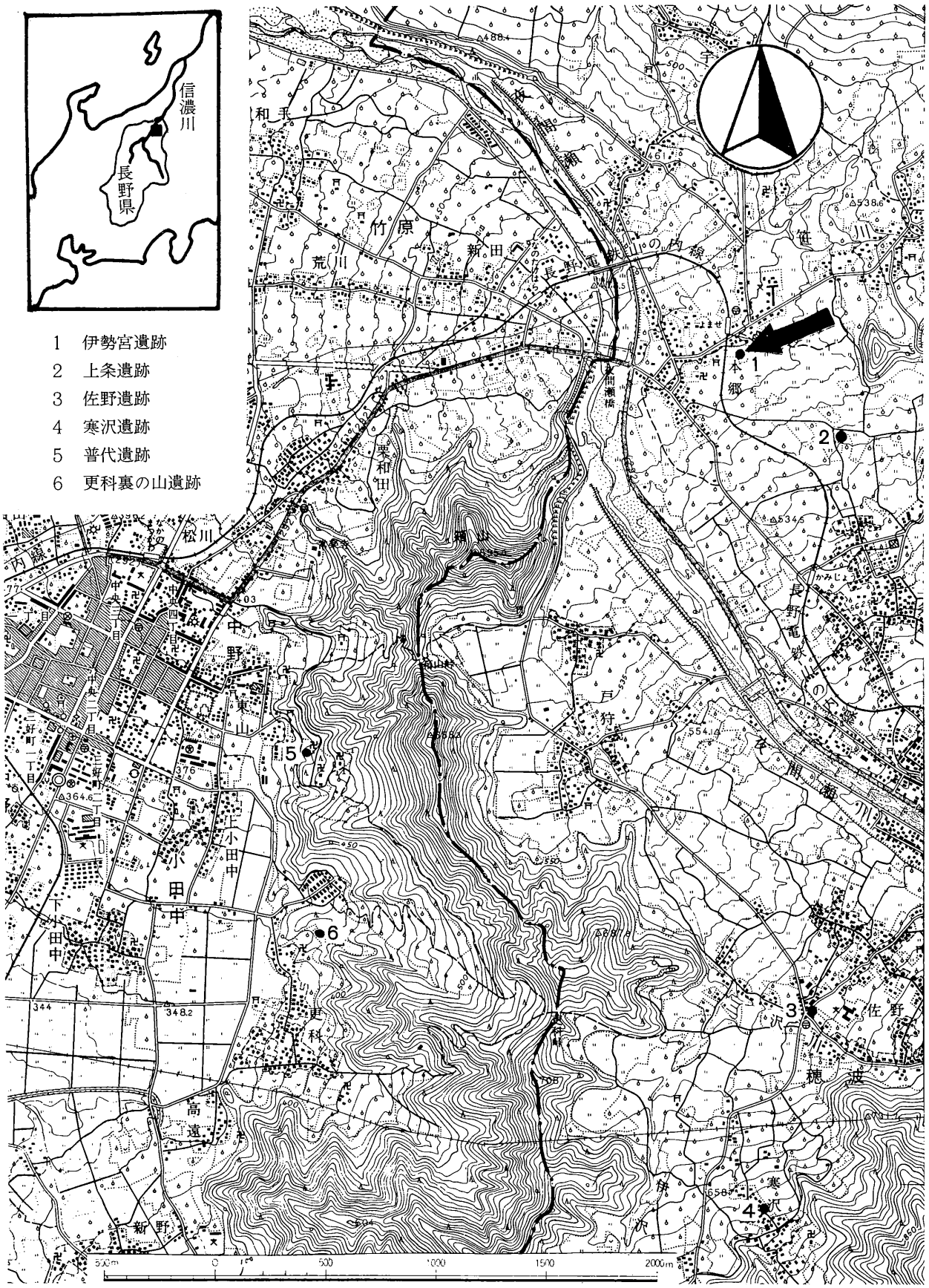
縄文式土器　４点（カラー）

左上　高さ20cm・口径14cm・低径 6.5cmの深鉢形の小形品。口唇に三カ所の隆起があり、その外縁に沈線を配す。低部近くを除き、全面に縄文を施す。その中にうず状円形の篦がき沈線２こを、上下に並列したのが７組ある。またうず状円形部の縄文の一部を消し美しさを加えている。薄手の精巧品である。

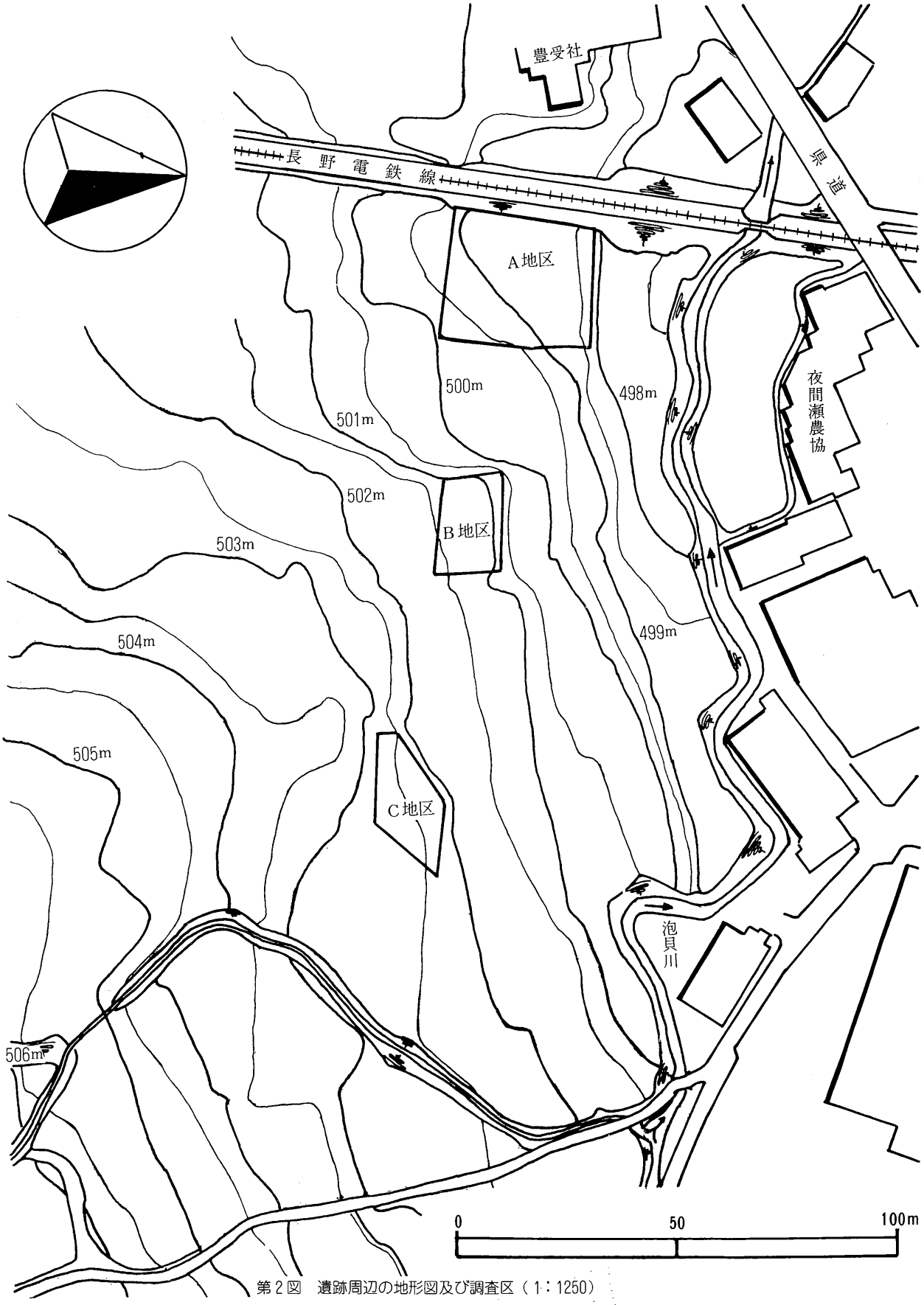
右上　口径23cmで胴部以下を欠く大形の甕か。口唇に５カ所の隆起をもち、くの字に外出した口縁を作っている。篦がき沈線内に縄文が施してある。

左下　高さ15cm・口径11.5cm・低径６cmの深鉢形の小形品。口唇に１対の隆起があり、そこに１穴ある。低部と口縁部の一部を除き、全面に縄文を施す。篦がき沈線は肩部に横に一条配し、たてにはU状の変形を数本施す。薄手の精巧品である。

右下　高さ17cm・口径19.5cm・ 5.7cmの甕形土器で、１号敷石住居趾より出土の完形品である。低部の一部を除き、全面に縄文を施し、上半部に篦がき沈線をU字形に施し、その中に数個の列点文を配するもの４個所。下半部にさかさU状の篦がき沈線文を４個所に施す。　（畔上秀雄）



第1図　伊勢宮遺跡の位置と周辺縄文遺跡分布図（1：25000）



第2図　遺跡周辺の地形図及び調査区（1：1250）

Ⅲ　A　地　区

ここは、今回調査の地区の中で、出土遺物が最も多く出土したところである。

地形は現在、西側に長野電鉄線が設置されていて、その路面が高くなっている。また東側は開田工事のため、石垣による高い土手となっていた。発掘前においては、かなり低い凹地にみえたが、原始時代に於ても若干の凹地であったことが、調査段階でも明らかになった。

発掘前のここの地目は、畑地であったが、数年前までは水田であった。そのため表土の第１層は、耕作土で、黒褐色土層であった。第２層は床土で、灰褐色を呈していた。第３層以下は場所によって若干異なり、下方の北側ほど黒褐色を呈し、南側ほぼ褐色土で砂礫を含んでいて、遺物の包含層である。第４層は主として遺跡面で、黒褐色土層で遺構が切り込まれている。第５層はいわゆる地山である。南側ほど黄褐色が強い岩礫層で、北にさがるにしたがい黒褐色となる。ピットや土坑等が切り込まれていた。

調査は、43年11月・12月に発見された、敷石住居跡や列状の配石遺構はそのまま保護しながら調査にはいった。44年３月Ａ地区にグリットを設定した。設定は西側から東に向かってＡからＭとし、南から北に向けて１から19とした。ここからは多くの遺構や遺物の発見をすることができた。トレンチは南北に中央に大きく１個所、西南と北東に短く各１個所入れて遺構と土層を確認した。

発見された遺構は配石を主としたものであった。その遺構は、柄鏡形敷石住居趾(2)、列石状遺構(2)、小集石状遺構(3)、広い集石状遺構(1)、配石土坑状遺構(28)、その他ピット多数にのぼる。

遺物もまた多数に及び、今回発見遺物の８割強は、このＡ地区からである。出土遺物は、次の通りである。

土　製　品（縄文時代）

甕形完形土器	1	胴　部	32,834	深鉢片	1	円板状土器片	6
ミニ完形土器	3	底　部	966	土器蓋	1	土　偶	1
口縁部把手	240	口縁部	2,849	注口部	3	耳飾？	1

石　製　品（縄文時代）

磨製石斧	20	凹　石	98	石棒片	35	磨製石片	35
磨製石斧片	4	凹　石　片	20	蜂の巣石	4	磨製平石片	100
打製石斧	64	石　皿	14	敲　石	13	石柱状石片	1
打製石斧片	85	石　皿　片	4	すり石	23	焼　石	14
石　鏃	31	石　鎗	2	すり石片	3		
石　匙	2	石　棒	11	磨製丸石	51		

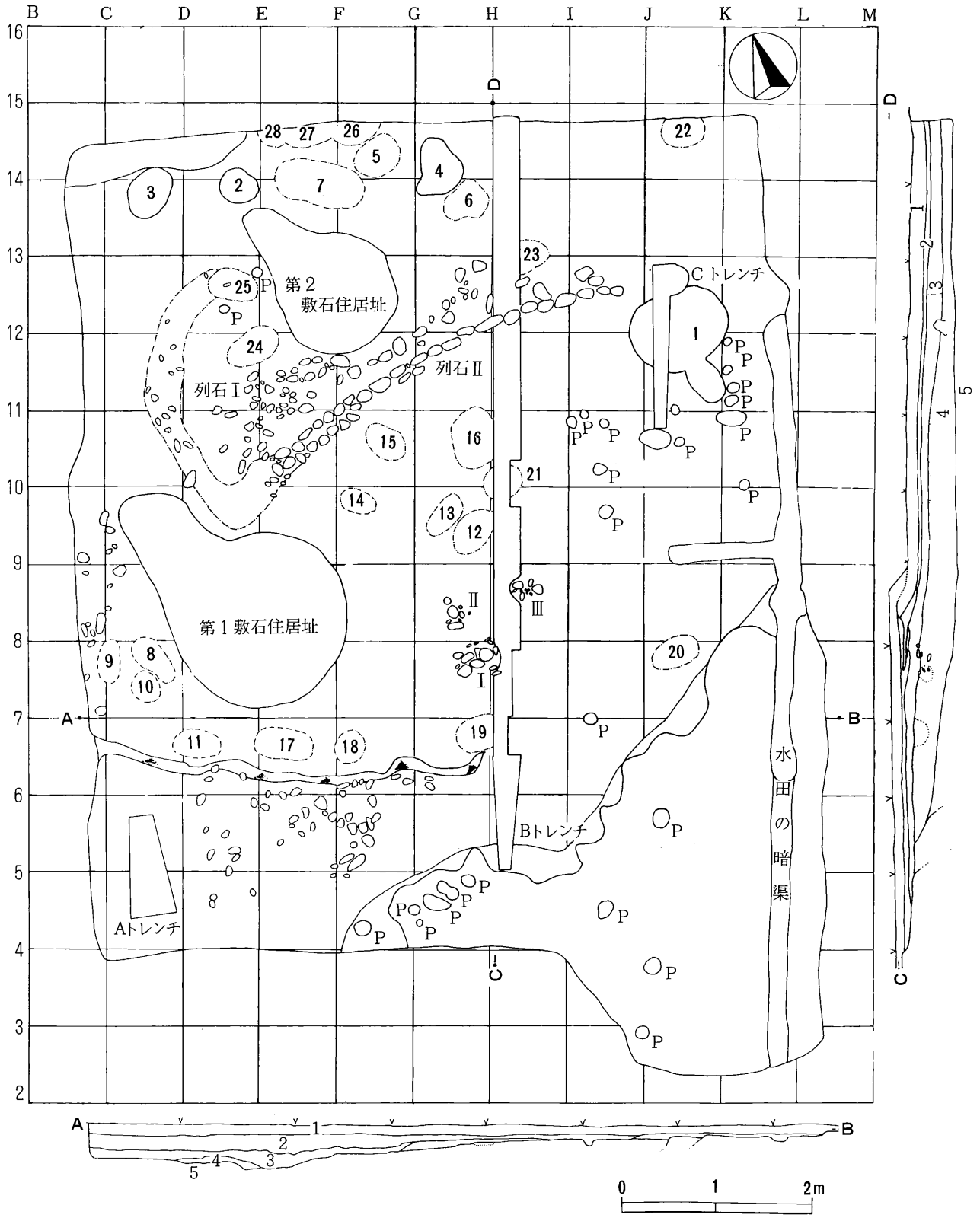
そ　の　他（縄文時代）

骨　片	467	木炭片	40

土　製　品（土師以後）

須恵器片	3	土師器片	1

（畔上秀雄）



第3図 A地区全体図（1：450）

柄鏡形敷石住居趾

今回の発掘では、A地区からは2例、C地区から1例の発見をみたが、ここではA地区の2例をとりあげる。

1号住居趾（第4図・9頁下の写真ほか）

A地区の中央よりやや西寄りより発見された。西北さがりの自然の地形の中に作られた感じである。東南に円形部を置き、北西に張出部が配置されている。円形部から張出部に向かって、わずかながらの傾斜をみせている。

周囲からみると、全体が一段と低く、特に円形部は竪穴状となっている。

円形部の周りは、扁平な安山岩平石や河原石によって、柱状あるいは壁状に地中に刺し込み周壁を支えているところが大部分である。東側のごく一部は、粘土によって固められている。周壁は、東南の奥壁付近で0.25m、張出部の近くでも0.2m前後となっている。

張出部の周囲は、円形部のような壁は検出されなかったが、内部の敷石は0.1m～0.2m前後低くなっている。円形部の壁にそって、発掘途上認められたことは、住居趾の屋根の裾を支えたとみられる岩礫の存在である。人頭大から拳大の河原石が、壁縁にそって両側に落ち込んでいた。（写真10頁上参照）

柱穴は円形部の外周にそって7個、張出部の外側に8個存在した。内部は、敷石の隙をぬって円形部に7個、張出部に8個存在した。柱穴は外周部の方が大きく約0.25m前後、敷石内は約0.18mとやや小さいのが多い。

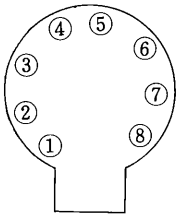
住居趾内の敷石は、安山岩平石を主として使用し、全面磨かれた石を敷きつめている。その間隙を河原の小石の平面を出し埋めている。この安山岩平石は、遺跡の東西共に約0.5kmの雀山や紫岩から求めることができる。

円形部の中央には、略五角形の石囲の炉があり、この中から縄文式土器が、上向の正位に置かれていた。

また円形部の出入口部に土坑が検出され、ここからは若干の土器片と、細長い棒状の河原石の凹石が置かれていた(写真12頁下参照)。張出部中央にも、土坑が存在した。ここからも若干の土器片の外に、石棒状石が検出された。

円形部中央の炉趾と、この二つの土坑は、ほぼ一直線上にほぼ等間隔に配置されている。S_1とS_2の平石は、土坑の蓋石とみられ、土坑に合わせるとピッタリであることが確認された（口絵のカラー写真参照）。

住居趾内出土遺物の特色は、円形部の壁にそって、右図のような状態に置かれていたことである。



①摩製石斧　⑤小形土器
②石　棒　⑥摩製石斧
③打製石斧　⑦石　鏃
④打製石斧　⑧円形土器片

2号住居趾（第5図・20頁写真ほか参照）

この住居趾は、全体の½ほどしか敷石部が存在しなかった。ここは始め、多角形（6～8角）の敷石住居趾とみなしていたが、周囲の土質の差異から、多角形の柄鏡形住居趾と断定できた。即ちこの住居趾の周辺部が弱い黒褐色土に対し、多角形部、無敷石部は築き固められており、細かい砂利が混入していた。また多角形に接する張出部は、自然土に砂利が混入していた。先端の張出部は、黒褐色の色が強く感じとれた。明らかに張出部の存在が認められた。そしてまたこの住居趾は、自然の地形に合わせて作られており、張出部の方が若干傾斜しており低い。住居趾は多角形部の幅3.6m、多角形部から張出部までの長さは5mである。

この住居趾の敷石は、1号と全く類似している。安山岩平石を磨き、間隔を河原石で埋めている。ただ敷石が円形部を中心に介状に存在するだけである。その敷石の張出部に近い先端に石皿を配している。

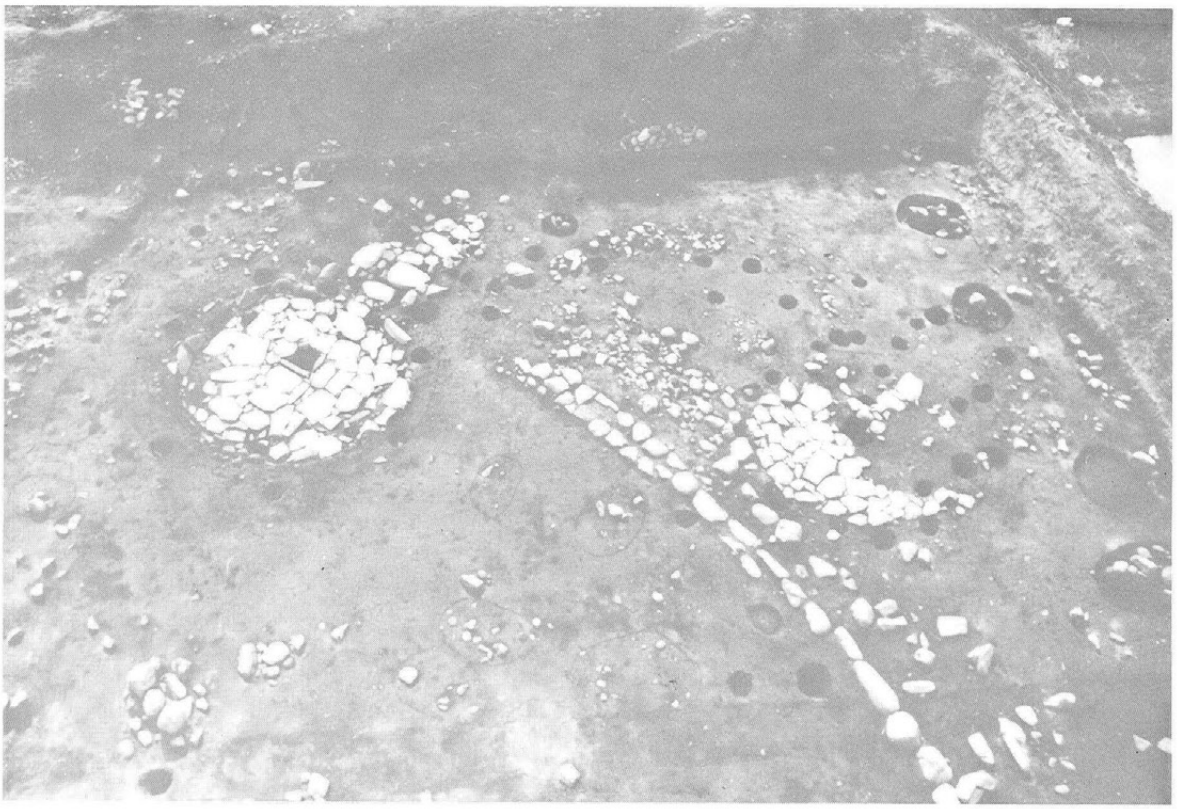
また中央は石囲はないものの、略円形の炉状をなし、口縁部と胴部を欠いた、縄文式土器2個が重ねて正位に置かれていた。2個の土器の出土した炉趾と石皿は、張出部と多角形部のほぼ中心部を走っている。

遺物の出土状態の特色として、1号と類似した東北角から同種の石棒が出土した。

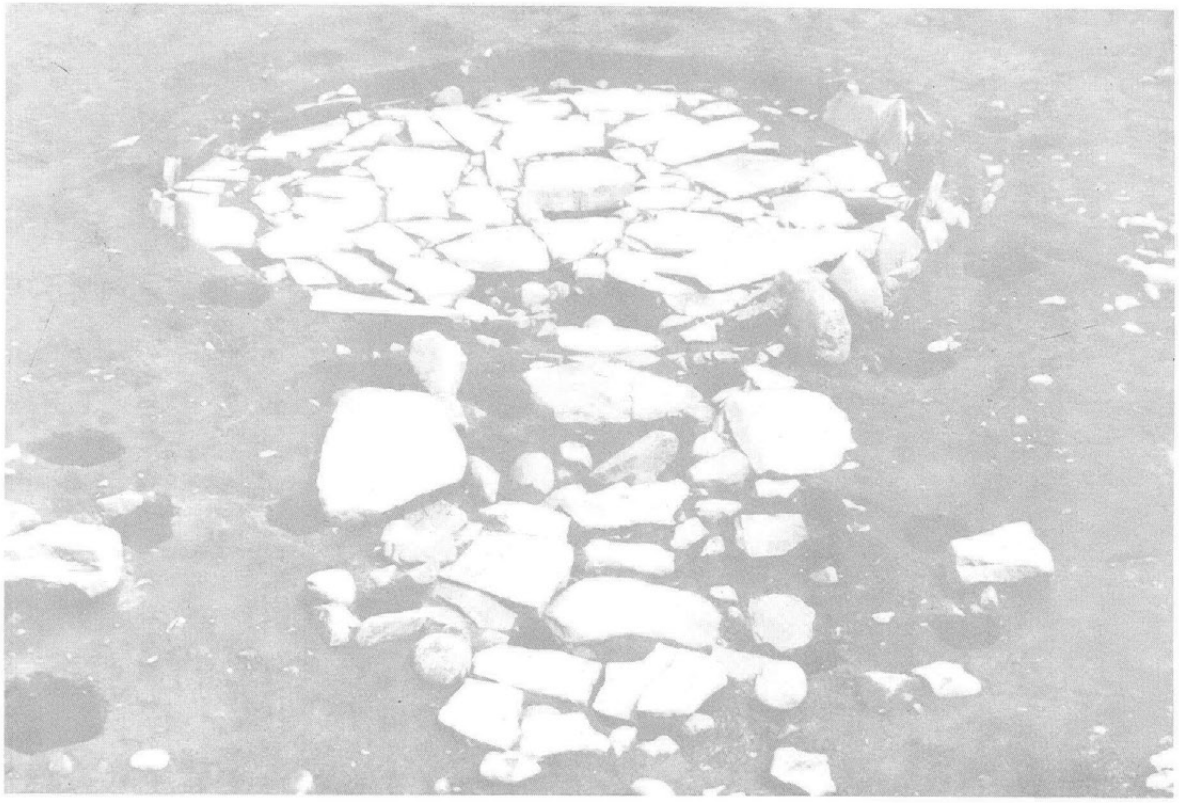
この住居趾は1号のように周囲の壁部が検出されなかった。しかし柱穴は、住居趾内から6個、外周から15個、検出されたが、大きさは、同程度の0.3m前後が主である。

後述するがこの住居趾の敷石部に接する配石の列状配石と、張出部先端に存在する配石土坑は、均正のとれた位置にあり、関係深いとみられる。

（畔上秀雄）



△柄鏡形敷石住居趾 1号(左)・2号(右)・(中央は列石)



△第1号柄鏡形敷石住居趾(発掘最後に写す)

△柄鏡形敷石住居趾（周壁部に自然石が集石されている）

△柄鏡形敷石住居趾左空間部（周壁の集石を取り除いた壁部の状態）

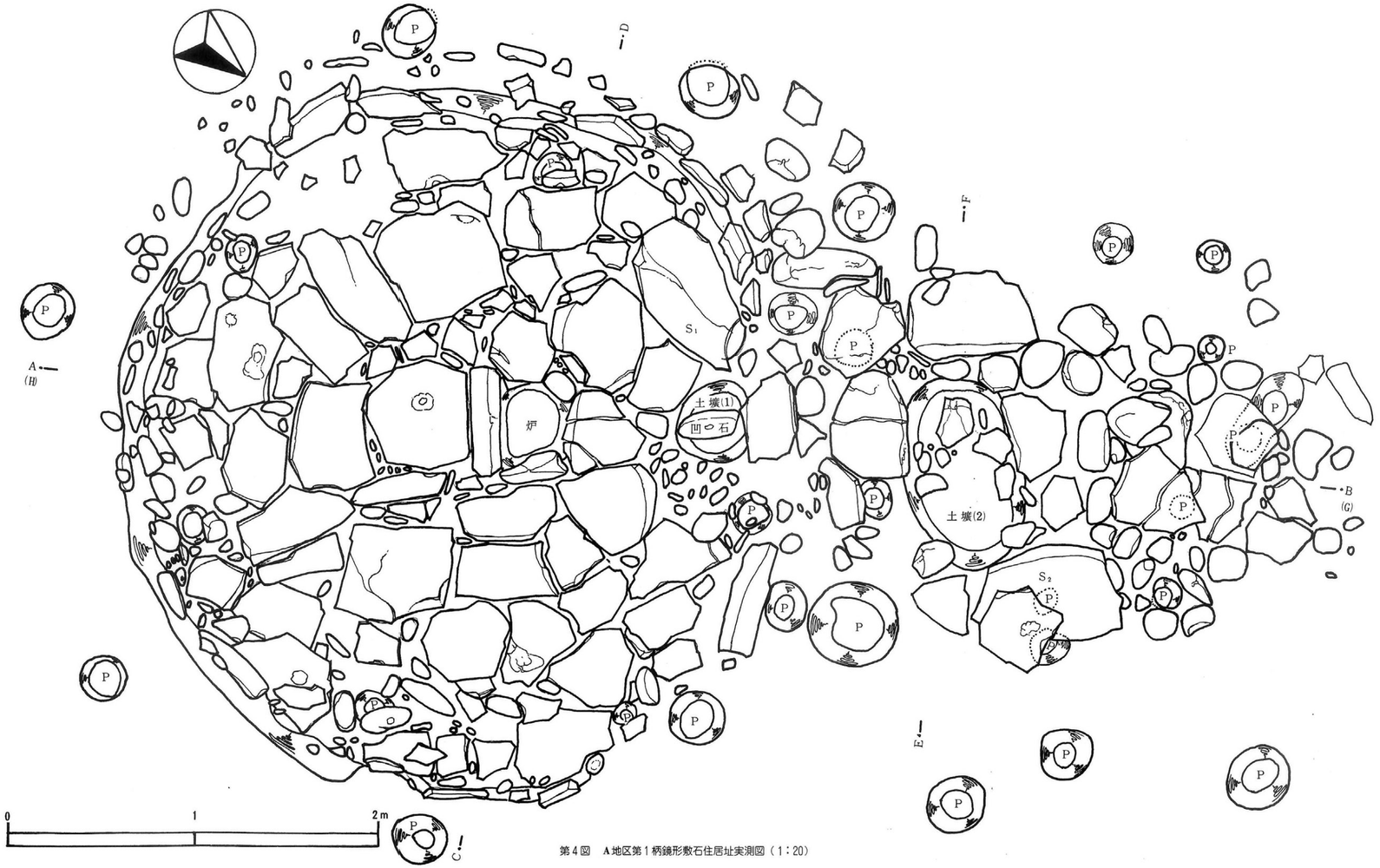
△柄鏡形敷石住居趾　右空間部
・敷石中央は炉　少しおいて右が第一号土坑
・中央横に孤をえがく周壁

◁柄鏡形敷石住居趾　奥壁部と周壁及び柱穴二個

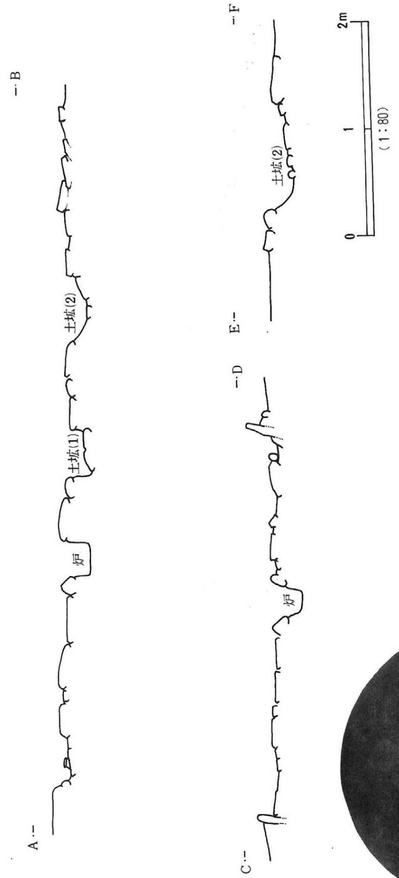
◁石組炉趾と土器

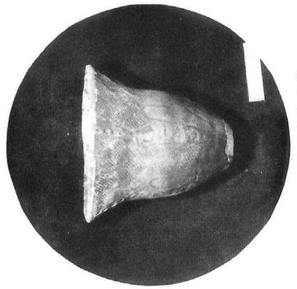
△炉趾内の縄文土器の状況

◁出入口部内の土坑(1)（中央部に凹石）



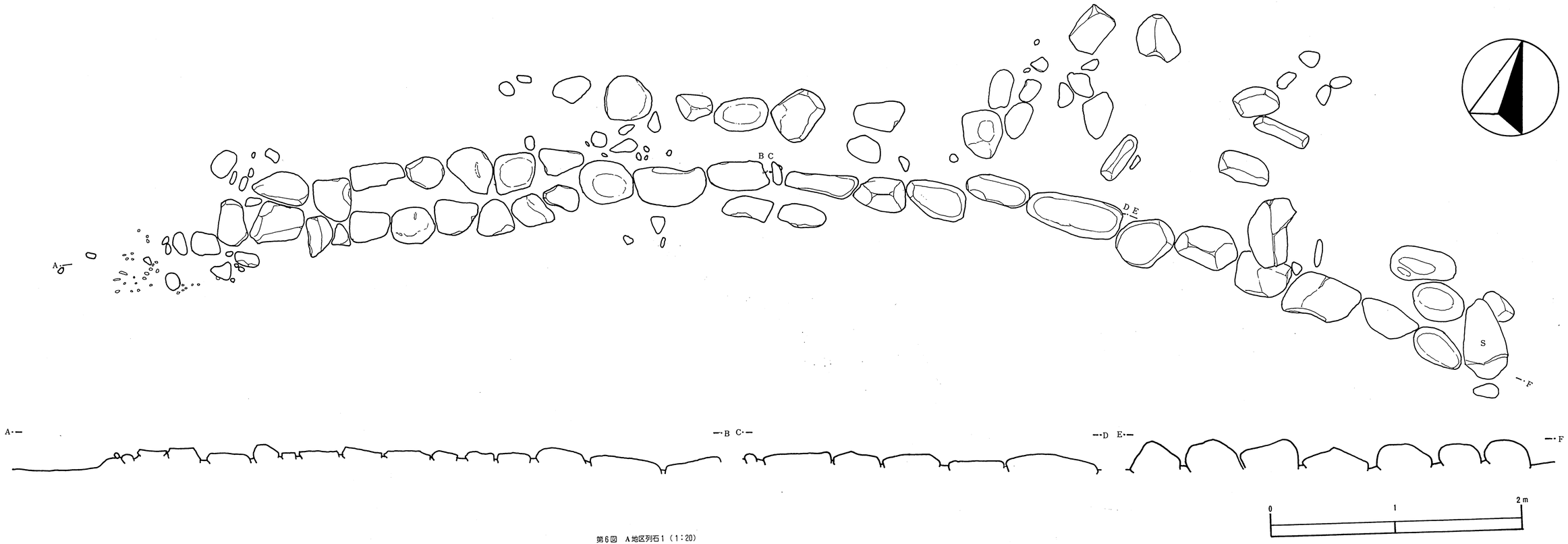
第4図　A地区第1柄鏡形敷石住居址実測図（1：20）



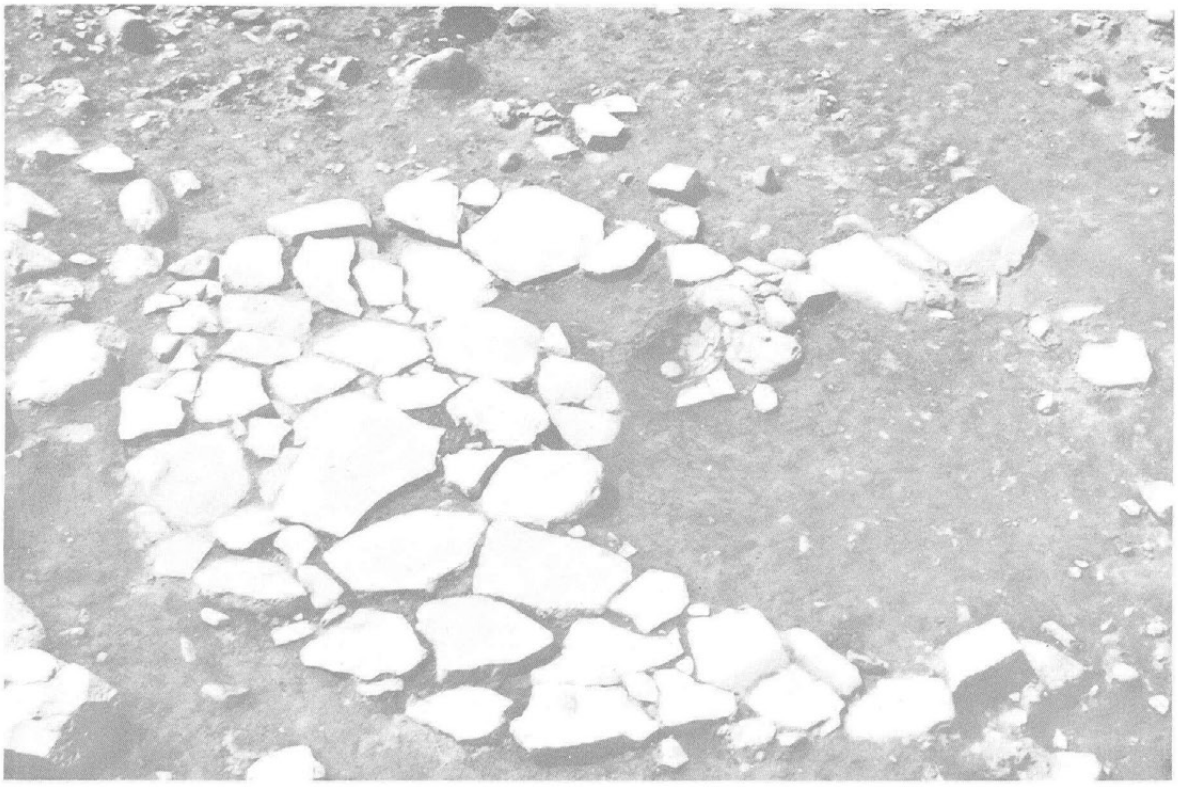


炉跡出土土器

第5図　A地区第2柄鏡形敷石住居址実測図（1：20）



第6図　A地区列石1（1：20）



△２号敷石住居趾（東側より）中央は炉趾内の土器 右のはしにみえるのは石皿

△中央部炉趾内の土器

配　石　遺　構

A地区の調査の遺構を一口に言うならば、配石を主にした遺構であると言える。敷石住居趾についてはすでに述べたので、ここでは次の配石遺構の内容をとりあげる。

○孤状列石グループの２例　　○土坑のない小集石グループの３例
○広い集石グループの１例　　○配石土坑グループ28のうちの１例

1、孤 状 列 石

孤状列石１号（第６図・写真22頁ほか）

柄鏡形敷石住居２号趾の南側に接して発見された。この列石が最初に検出された時は、無雑作に列石の周辺に岩礫・土器片・骨片・等が乗っていた。それを取り除いたところ、写真や図面に示す状態となった。

列石は人頭大以上のものが主である。東端のＳ河原石は細長く横たわる浮石である。以下西方に向かってゆるい孤状をえがき配石が地中に埋まっている。これは途中敷石住居に接近したところを過ぎてより２列になり、やがて列石が切れる。全長11ｍである。列石が切れたところから、大豆大の以下の小礫が約0.8ｍ続き、自然に消える砂利質土となる。そして柄鏡形敷石住居趾に接する。この砂利質土は、列石を取り除いた時の埋立土とみられる。

このように西端はうやむやに終るが、東端の区切れは明確で、先のＳの細長い岩石は立石状石で、その岩石の根元は土質がやわらかく、立石であったとみなされ、後に何等かの影響で倒れたとみられる。

全体的な配置と列石西端の状態からみて、２号住居趾とかなり関係深いとみたい。

孤状列石２号（第７図）

２号住居趾より約１ｍ離れた位置より発見された。１号列石のような大きな岩石を利用せず、拳大を中心にした河原石である。列石というよりは、集石した感じで、ところによって異なるが幅0.8ｍ、長さ5.5ｍで、１号と同様に孤状をえがいている。１号とは同一形態ではない。

△２号敷石住居趾と１号列石と２号土坑

2、広い集石遺構（第11図）

A地区の南側で、先の2つの敷石住居趾より0.4mから0.8m前後の高い位置になる。西側が長野電鉄線路にさえ切られ、南側が圃場整備地区外であるため、その全容はつかみにくい。

しかし全くつかめないわけではない。この遺構の東南は住居趾の柱穴とみられる遺構が、半円状に2ケ所以上にわたって顔を出している。この住居趾とみられるものは、開田工事の際に削りとられ、そのまとまりを欠く。一応住居趾の外縁部の配石遺構とみる。

発見された集石地帯は略東西8m・南北4mである。無雑作の集石は河原石を中心とするが、注意を引くところを2・3取り上げてみると、安山岩平石が数枚平らに置かれているところ。ぼろぼろな石棒が横たえられている場面。蜂の巣石が2個置かれていたところ等である。この岩礫の中に土器片・石器片も散存していた。

これらのうち特に気付く点は、蜂の巣状石が検出された、ほぼ中央部付近からは、黒燿石や粘板質の石屑145点以上がみられた。また、砂岩質の石皿状の砥石の発見もある。石器製造場所か、石器の捨て場か。それとも特殊な遺構か。

3、土坑のない小集石遺構（第8図・写真26頁）

柄鏡形敷石住居趾1号の東約4m付近から、3号の土坑のない集石趾が検出された。たまたま、B号トレンチがこのうちの2ケ所の遺構にかかり、土坑のないことが確認された。他の1ケ所の遺構も、その形態が類似しているので土坑がないとみたい。

Ⅰ号集石　人頭大の河原石3個（S_1・S_2・S_3）を並べ、その前面に平らな石（S_4）を置く。その囲りを拳大の河原石をめぐらしている。これらの集石は焼かれており、特にS_1はひび割がみられる。

Ⅱ号集石　左右に人頭大の河原石（S_1・S_2）を置き、その中間に拳大の小石5個を配置し、さらにそれをS_3・S_4のやや大きい礫石で囲っている。

Ⅲ号集石　S_1・S_2・S_3・S_4と次第に大きな礫石を並べ、その間を小礫によって埋めている。

以上3号の共通点は、先にも述べたことを含めると、土坑を持たない。小さいまとまりながら、一定のリズムがある。1号のS_1にみられる、焼かれたりした火のあとが確認されるなどである。

4、配石土坑（第9・10図・写真29・30頁）

配石のある土坑が28号検出された。2つの敷石住居趾の周辺で三群となる。住居趾の南・東・北である。西側は電鉄線のため未発掘のため不明である。

これらのうち8号を発掘した。その特色の概要を示すと、ほとんどがだ円形に近い。幅0.5m・・長さ1m前後・深さ0.4m前後である。土坑内は小礫を含む土器が散在している。その内容は取りたてるほどのものでない。しかしこれらのうち特色あるのが柄鏡形敷石住居趾2号の張出部先端の2号土坑である。

2号土坑　幅0.5m・長径0.8m・深さ0.4mのほぼだ円形の土坑である。土器片と共に河原石・安山岩平岩のある点は、他の土坑と変わりない。その特色は、人頭形岩石の首元に、菱形の尖石部を差し込まれていたことにある。人頭形の岩石は、長さ0.3m・幅0.2m・厚さ0.1mで、ちょうど大人の人頭大を平たくしたものである。額と頭髪部がやや盛り上っている。河原石であるが、ふき出物状の小穴が全面にあるが、ここに眼・鼻・口や耳を切り込むと人面石を思わせる。

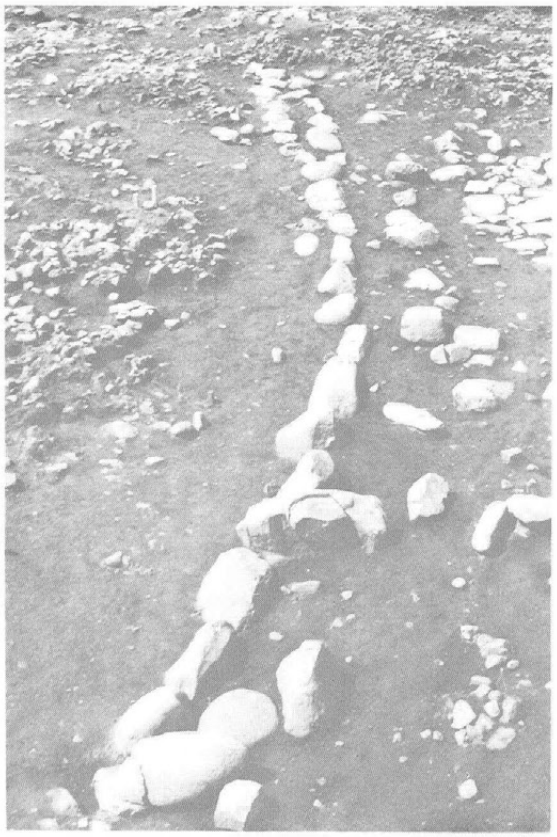
この岩石は、土坑のほぼ中央から検出され、首部に近い位置を斜め下向にし、顔面を上向きにして置かれていた。そして菱形石の平石の尖部を、顔面石の首部に突き差し置かれていた。ちょっと無気味である。

この土坑は、柄鏡形敷石住居趾の張出部先端部に位置しており、何等かの関係があるとみられる。

（畔上秀雄）

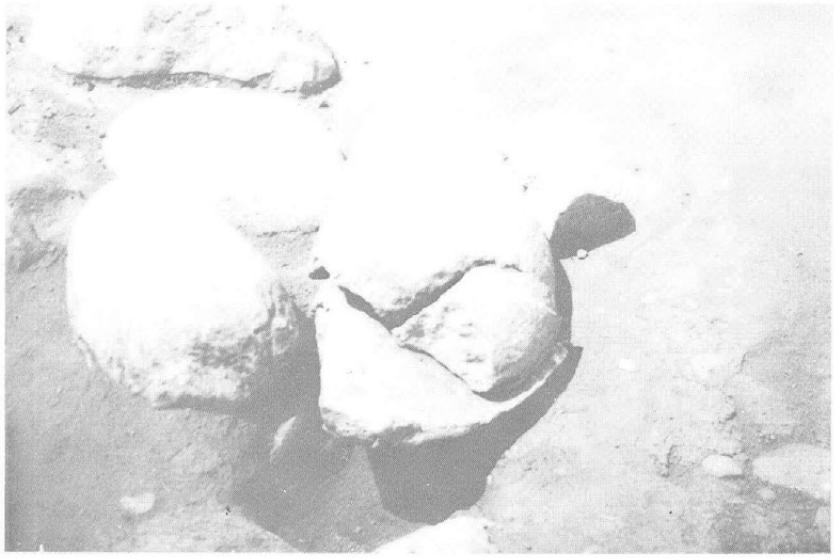
△列石１号（西側より）

▽列石と敷石住居跡（東側より）　ほかに土坑や柱穴もある。

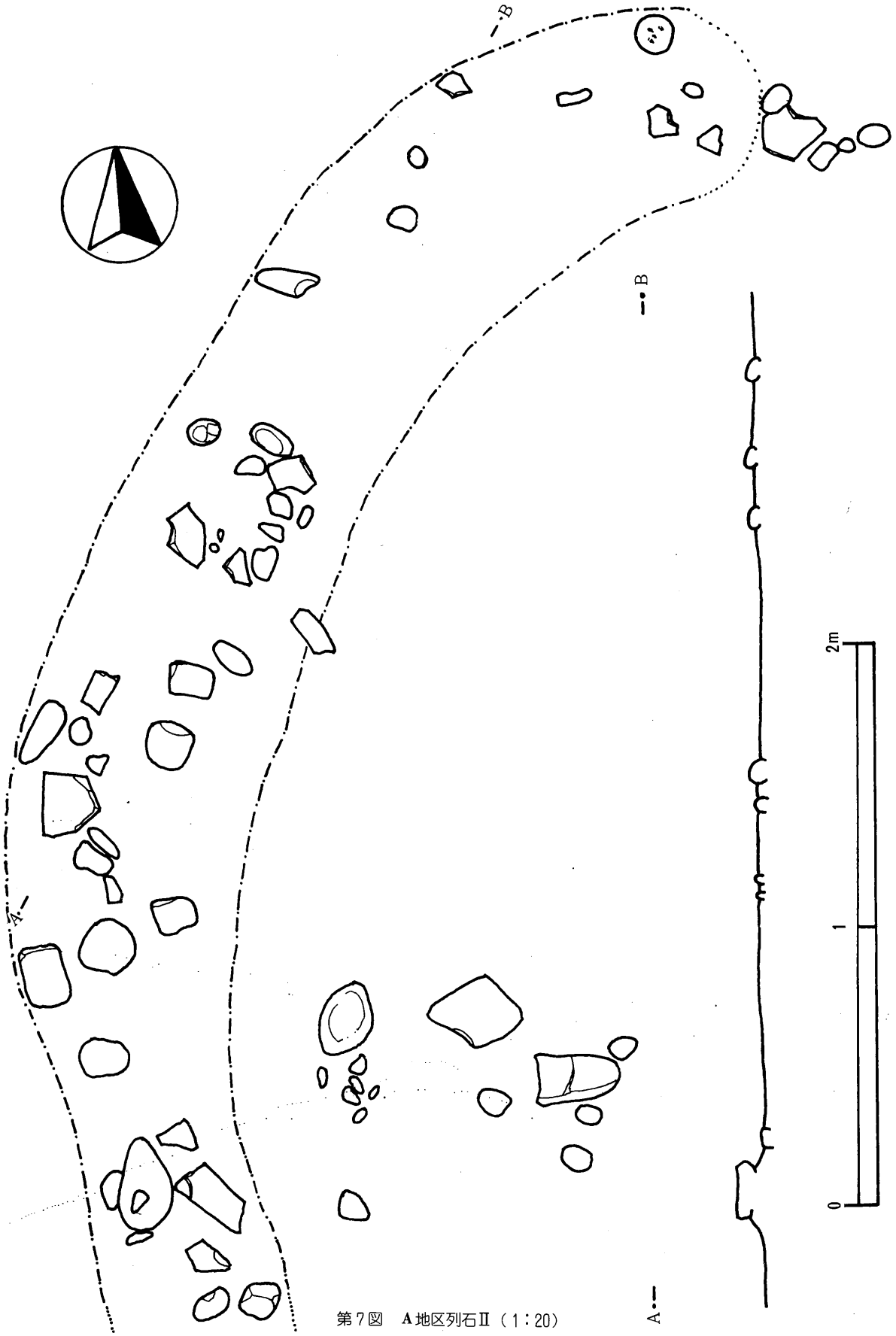


◁列　石（東側より）

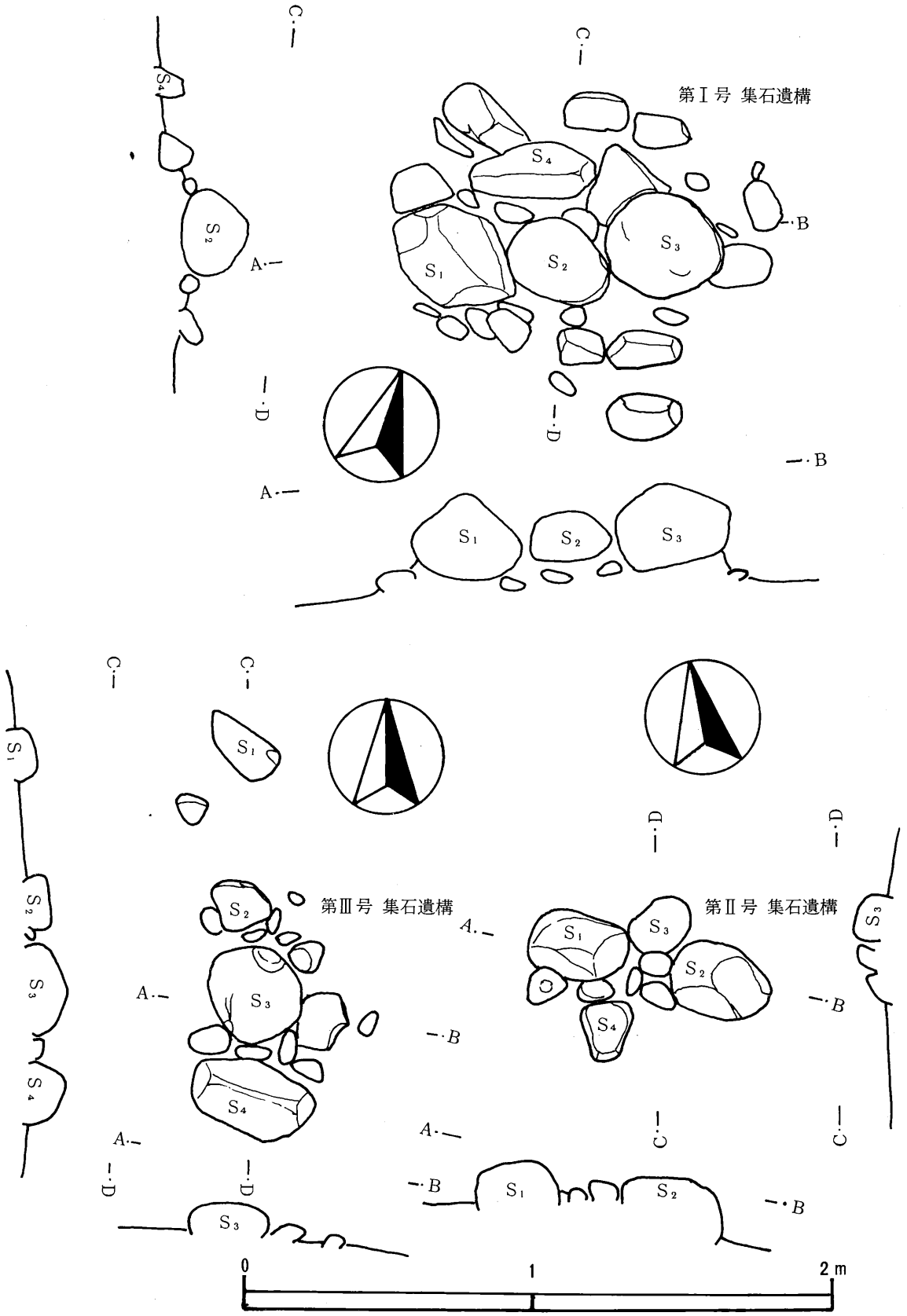
△列　石　中　央　部



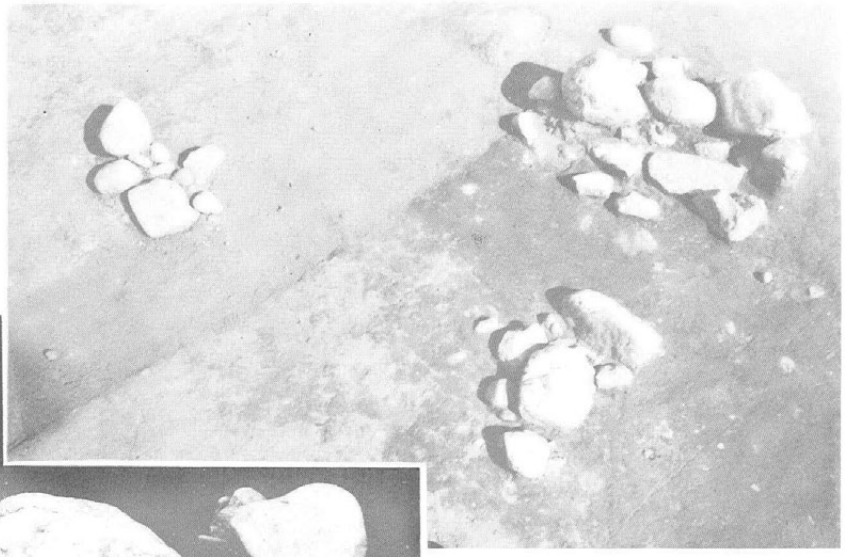
◁列　石　東　端　部　の　状　況
・東端の石は立石状でころんでおり
その下は土がやわらかく小穴状をなす。



第7図　A地区列石Ⅱ（1：20）



第8図　A地区集石遺構実測図　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ号（1：20）



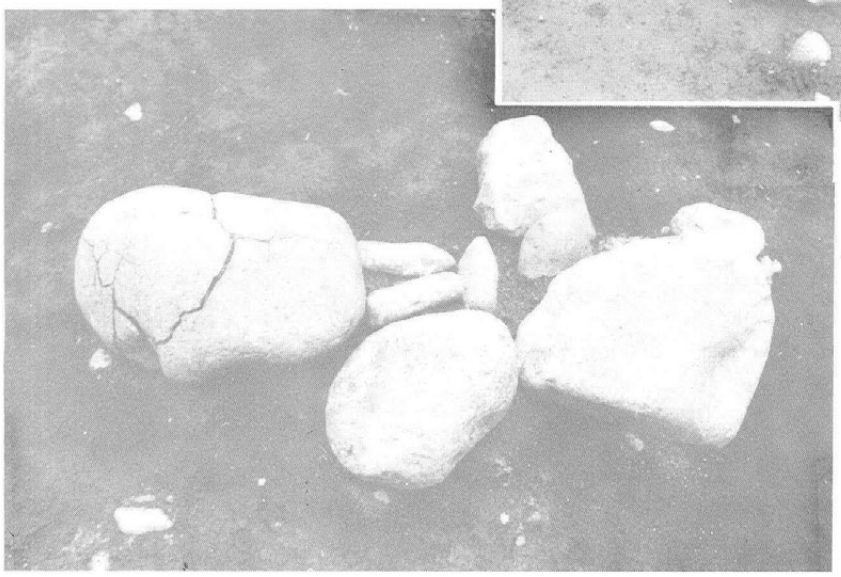
△石組集石遺構（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ号）

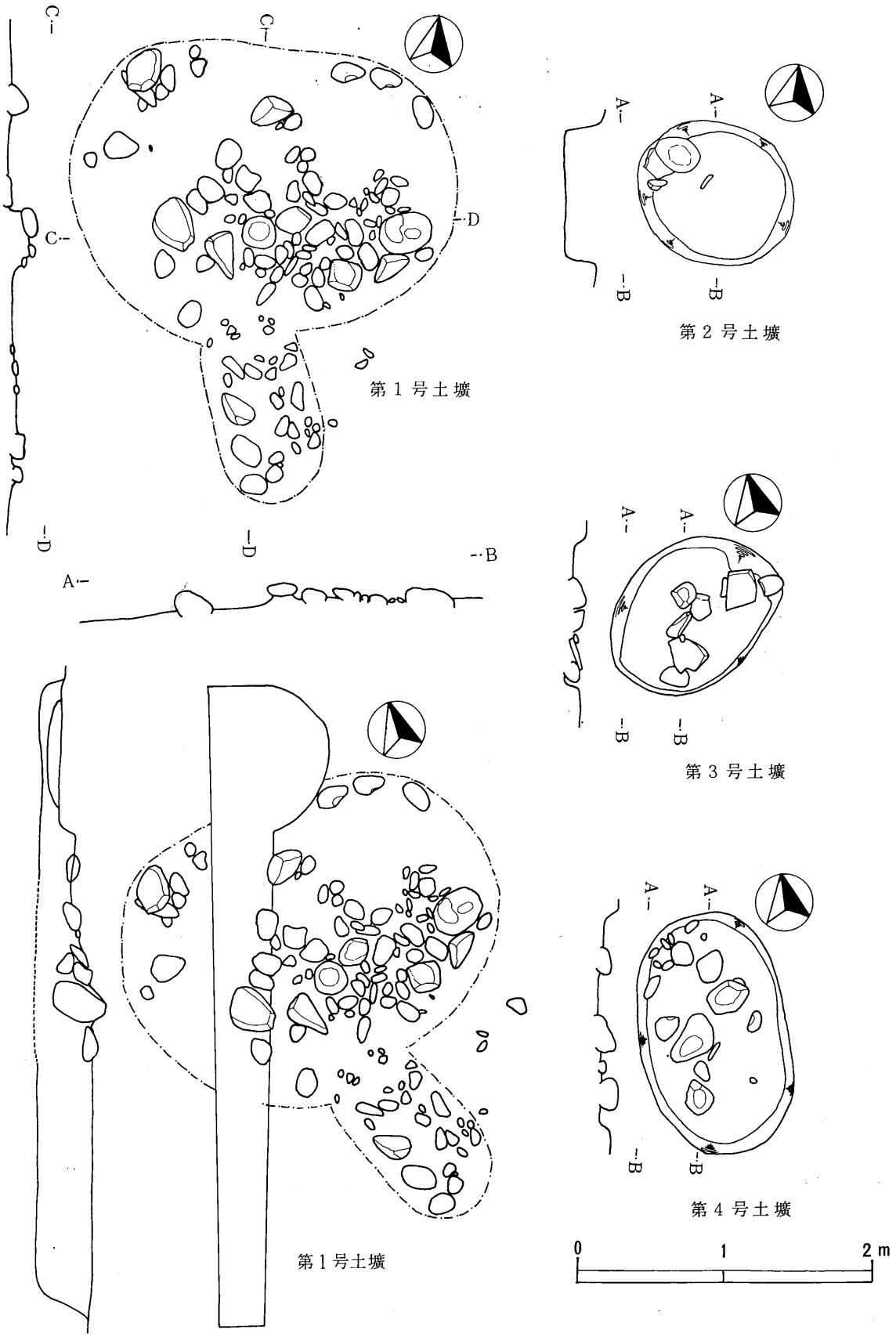
△石組集石遺構Ⅲ号

△石組集石遺構Ⅰ号

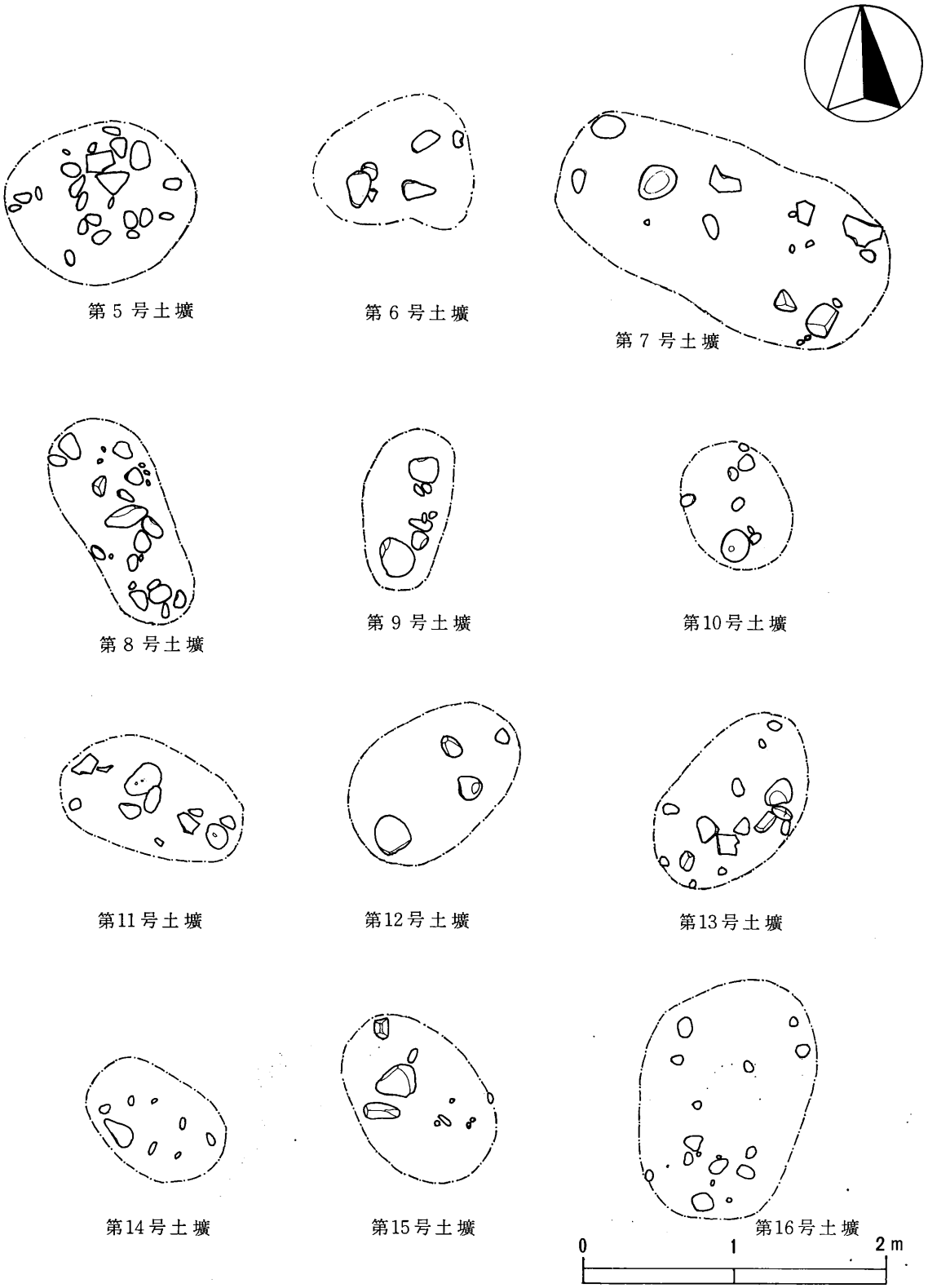
• 右端の石は焼石状をなし
ひび割れている。

▽石組集石遺構Ⅱ号

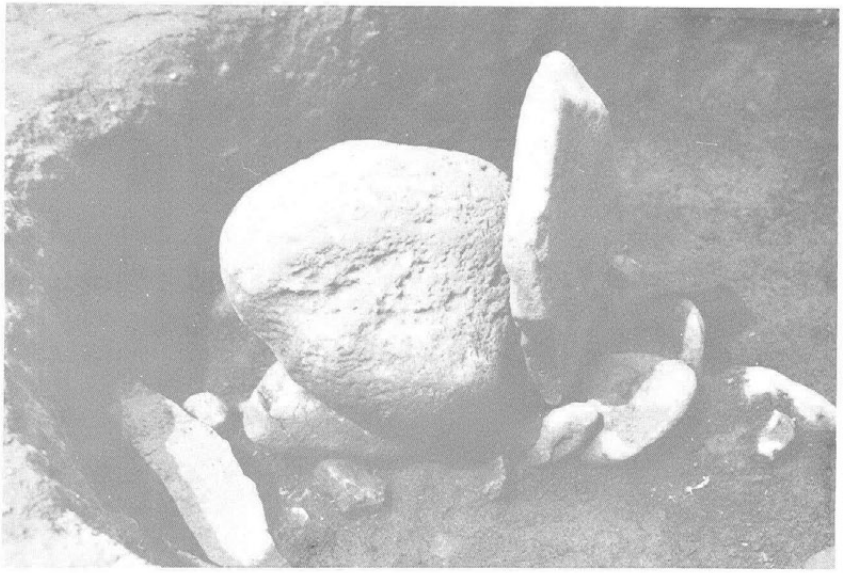




第9図 A地区土坑実測図〔1〕1・2・3・4号（1:80）



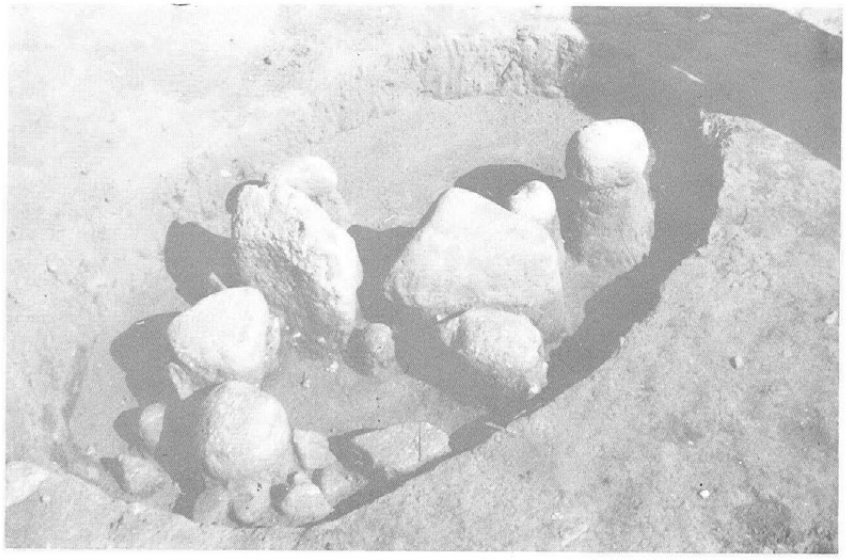
第10図 A地区土坑実測図〔２〕５～16号（１：80）



◁土坑墓　(1)

・二号土坑墓には人頭形石の首元に菱形平石の先端をさし込んでいる

▷土坑墓　(2)



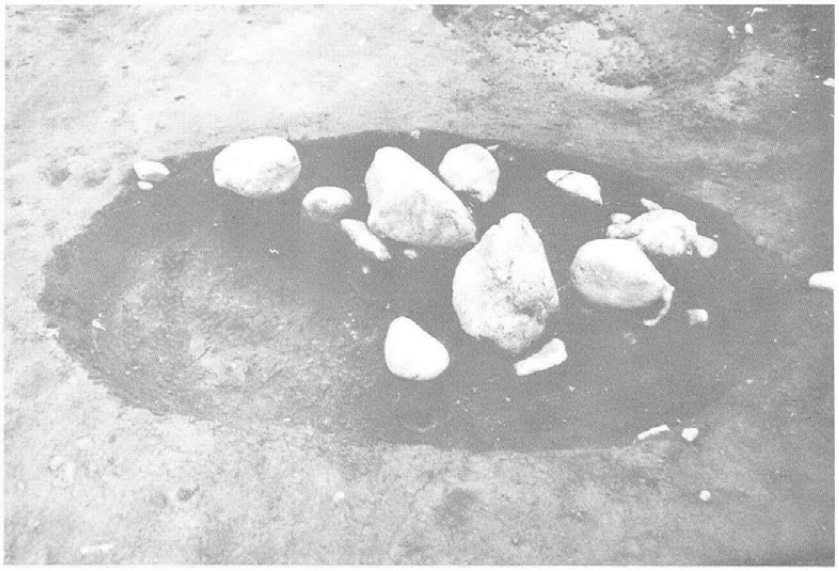
◁土坑墓　(3)

◁土坑墓

(4)

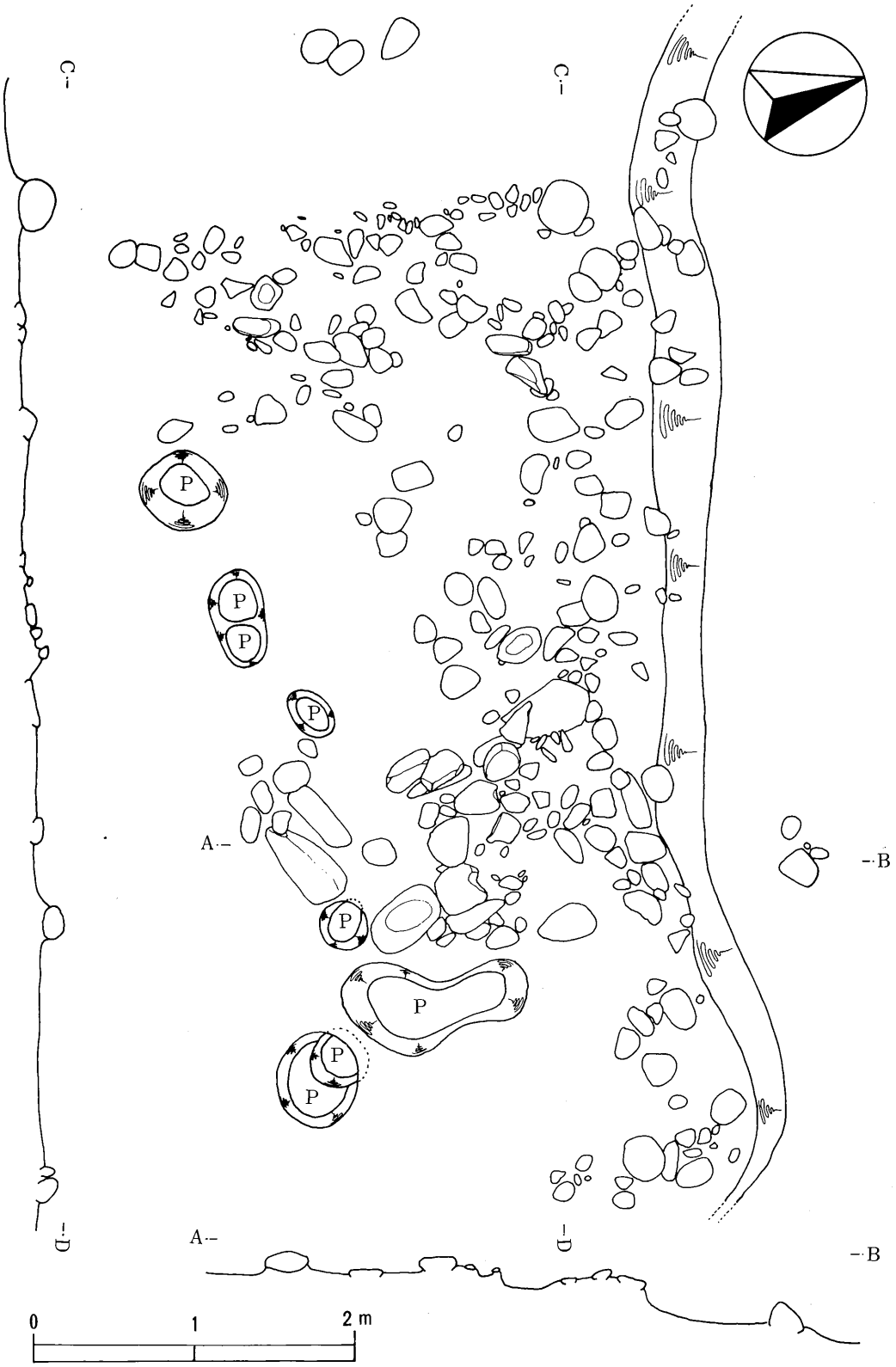
▷土坑墓

(5)



◁土坑墓

(6)



第11図 A地区配石遺構実測図（1：80）

Ⅳ 出 土 遺 物

出土遺物については、ＡＢＣのそれぞれの地区でふれるが、ここではその概要を示す。

1　土製品

縄文式土器(1)（扉のカラー４点）左上下の２個は小形の深鉢形、右上は甕形か。これらは共に口唇部か数ケ所上へ隆起している。右下の甕形土器は、敷石住居炉趾出土である。共に文様は、縄文を主に篦状沈線文が走る。

縄文式土器(2)（37頁中央）注口土器で、口縁と胴部以下と注口部を欠く。文様はひも状凸帯に篦状沈線文を施し、平面部が縄文がべったりである。つりの把手が１対ある。やや白褐色である。

縄文式土器(3)（39頁～46頁）扉のカラー写真の各部分のものとみればよい。しかし異形な部分や文様もかなりある。

縄文式土器(4)（47頁上）蓋形土器で、つまみの部分と蓋の大部分を欠く。中央から4条の凸条帯があり、突刺文となっている。内側は文様がないが、中央部は1.4cmの小穴となっている。蓋の径は14.8cmである。

縄文式土器(5)（47頁～50頁）口縁が外ぞりをしているのが多い。把手はごく簡単で、その文様も若干の凹凸の変化をつけているだけである。肩部附近に凸帯を附しているが、口縁に近い部分を除き全面に突刺文を施している。

縄文式土器(6)（38頁写真上４点）鉢形２点・円筒形１点・椀形１点である。写真右上の一点を除き、高さ4cm以下のミニチュチア土器である。文様はいずれもなくやや粗製品である。

縄文式土器(7)（38頁下右４点）土偶の完形品はなく、胴部１点・顔面１点・胸部以上２点の計4点である。いずれも小形品である。

土師器（59頁）皿・椀等である。今回の発掘のおり、各地区遺構の表採によるものである。器台のあるもの以外は、低部に糸切のあとがみられる。

2　石製品

打製石斧（51頁）粘板岩のものが大部分である。長さは、大きいもので13cm、小さいもので８cmである。形は、短冊形・分銅形が多い。

磨製石斧（52頁上）材質は多様で、安山岩・砂岩や頁岩等である。完形品は１点（中央下)だけで、ほかは頭部か刃部を欠いている。小形の１点（右下）は極部磨製の完形品である。

石鏃（52頁下）黒燿石や頁岩が主である。小形の石鏃が多い。

ミニュチア石器（52頁中）小形の磨製石斧２点（蛇紋岩）・垂飾（褐色）・小形石皿（褐色）・石匙(黒褐色)などである。垂飾と小形石皿の材質は似ている。

石棒（56頁上）大小４本あるが、いずれももろく、うす緑色のことが共通している。

石皿（55頁）片口状の皿部をつくっている。裏面をみると、足付・凹石・蜂の巣石等となり多様である。

蜂の巣石（55頁中と下･56頁中･58頁下）石皿の裏面・河原石・石棒状の石に、人工または自然の穴が蜂の巣状になっている。その数は、数個から50個以上に及んでいる。

凹石（53頁・54頁）径10cm内外の河原石に、１～２この小さな凹を両面または片面につくっている。凹みの深さは１cm以内・径は 2.5cm以内である。石皿状凹石は、深さ11.3cm以上･径５cm以上で、石全体もかなり大きいので区別して考えた。

すり石（58頁上・中）棒状のものもあれば皿状や自然石もある。いずれも磨いたり、すったりした残痕があり、なめらかである。58頁の上段は巨大である。同中段は比較的小形である。これは１号敷石住居趾より出土した。

3　その他の出土品

骨片　多数発見されたが、人骨片が$\frac{2}{3}$以上である。

自然石　水晶石２点・ろう石１点・豆状小石５点でいずれも美しい。

石くず　石斧等の石器を作った残欠とみられ粘板岩・黒燿石・頁岩等多量である。　（池田　実男）

◁土偶出土状況　(1)

・顔の長さ四㎝、幅三・三㎝、裏に二条の沈線がある。

▷土器口縁部出土状況　(2)

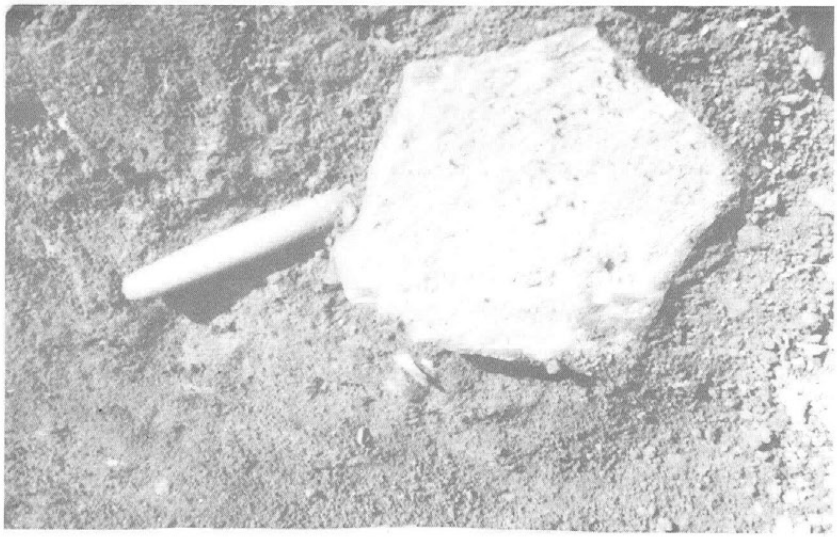
◁堀ノ内式・三十稲場式土器出土状況　(3)

◁出土状況小型品　(4)

・一号敷石住居趾円形部南壁にそって出土したミニュチア。高さ五・四cmのもの。

◁土器出土状況　(5)

◁蜂の巣　石出土状況　(6)

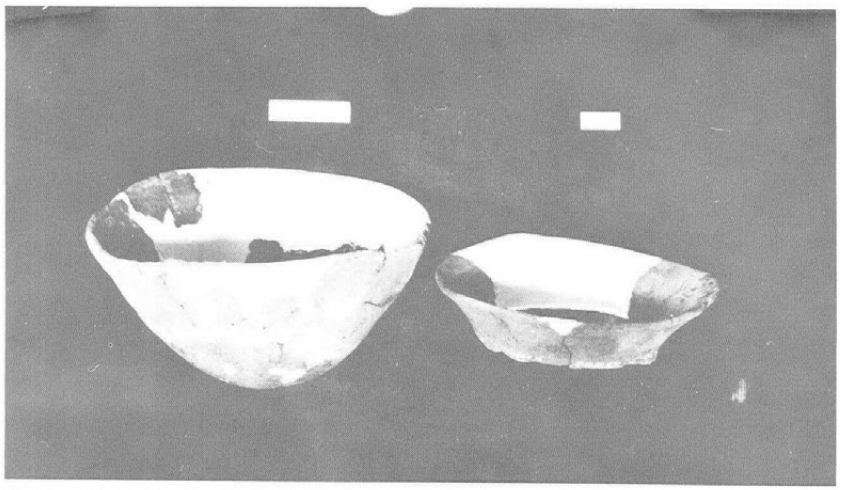


◁二号敷石住居趾内出土 石棒出土状況 (7)

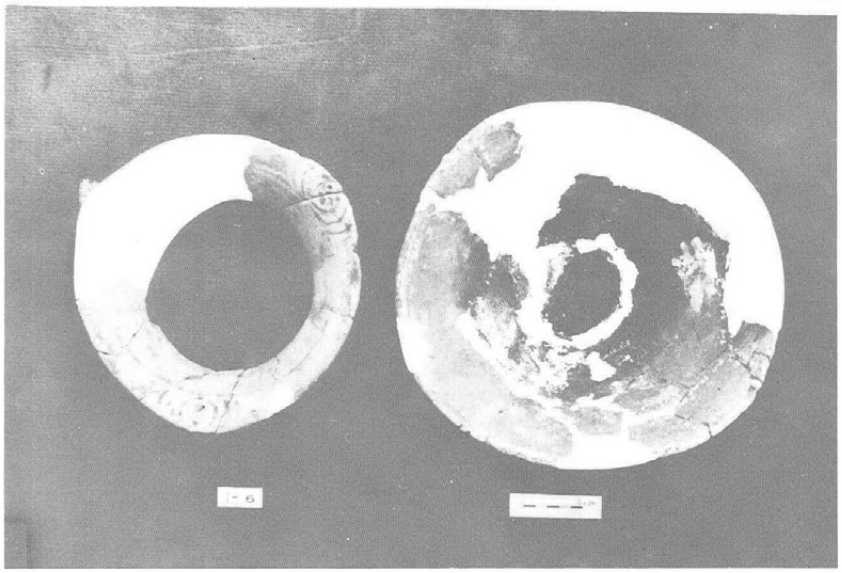
◁一号敷石住居趾内 打製石斧出土状況 (8)

一号敷石住居距内
磨製石斧出土状況 (10) ▽

石皿出土状況 (9)

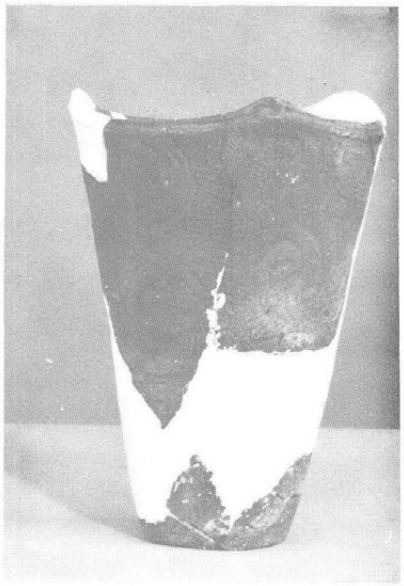


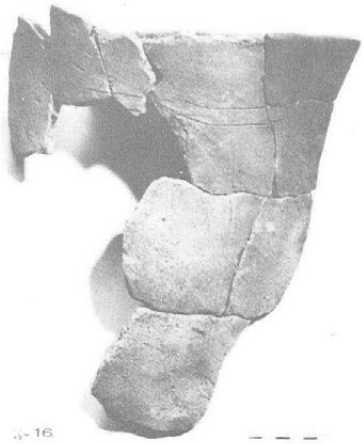
◁縄文式土器低部と口縁部（横から）



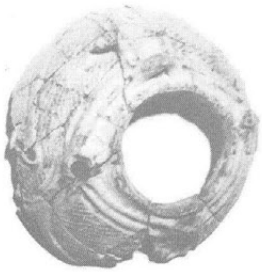
◁縄文式土器低部と口縁部（上から）

▽縄文式土器 深鉢形土器と文様





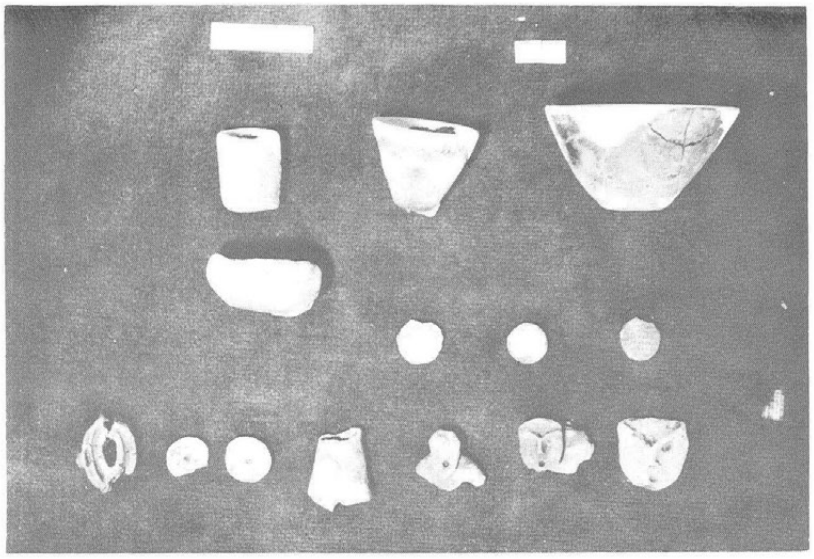
◁縄文式土器
（甕形土器）



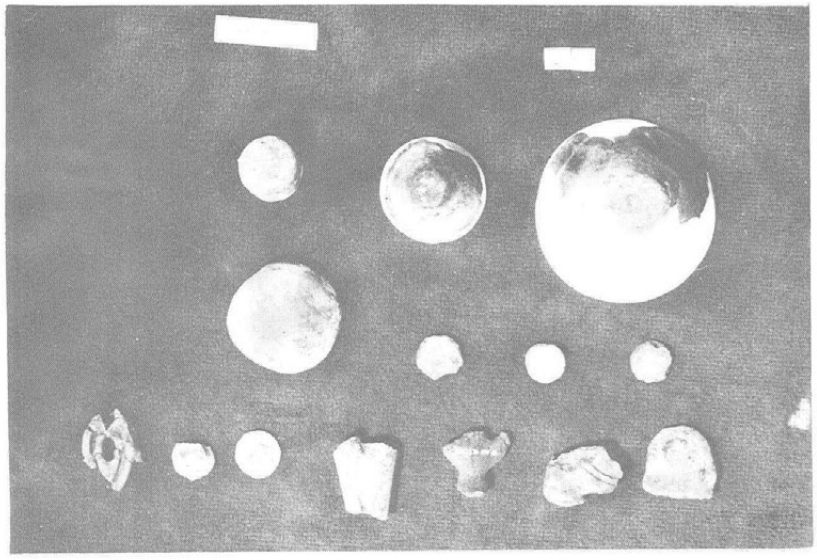
◁縄文式土器
（注口土器上と横から）

◁縄文式土器低部
（横と下から）

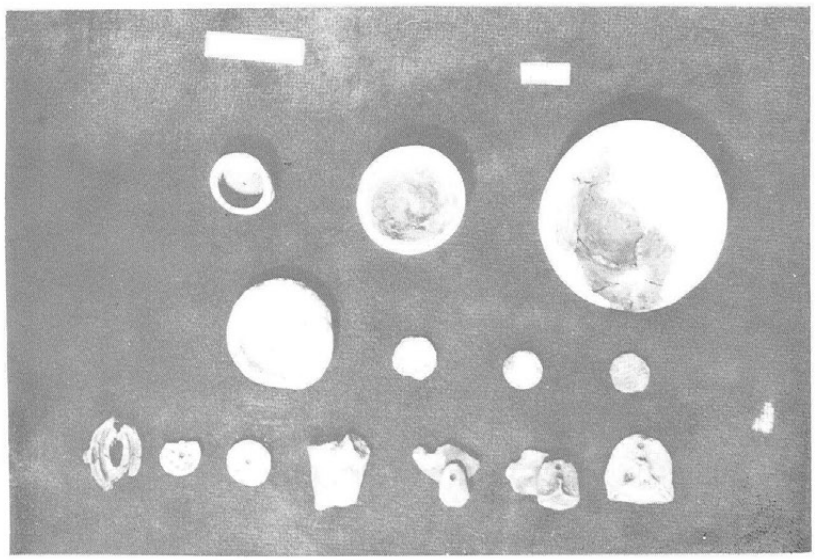
右上は小形の鉢形で文様がない。つぎの三個はミニュチア作品。中央で丸い三個は円板。下の右から四個は土偶。左の三個は耳飾かどうか不明。



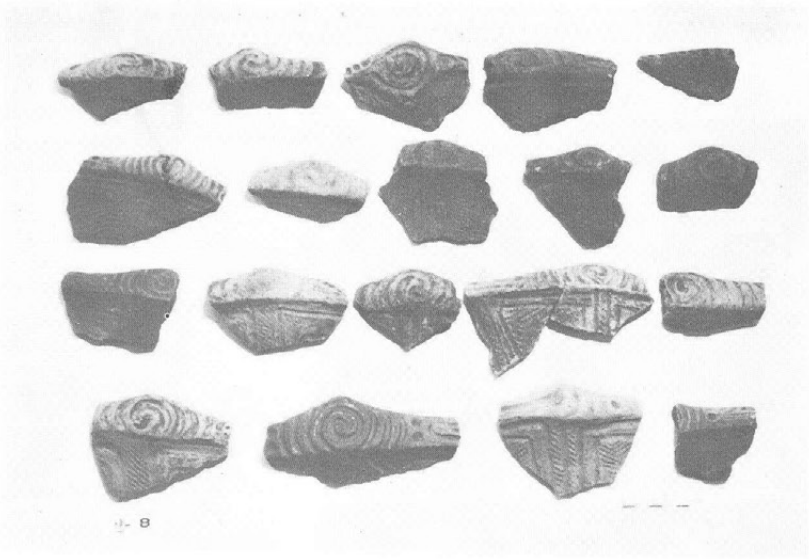
◁縄文式土器 小形品（横）



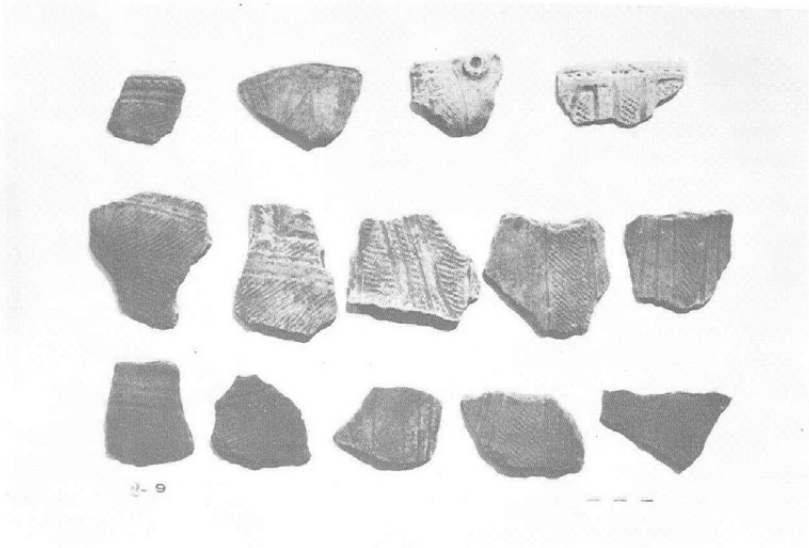
◁縄文式土器 小形品（下）



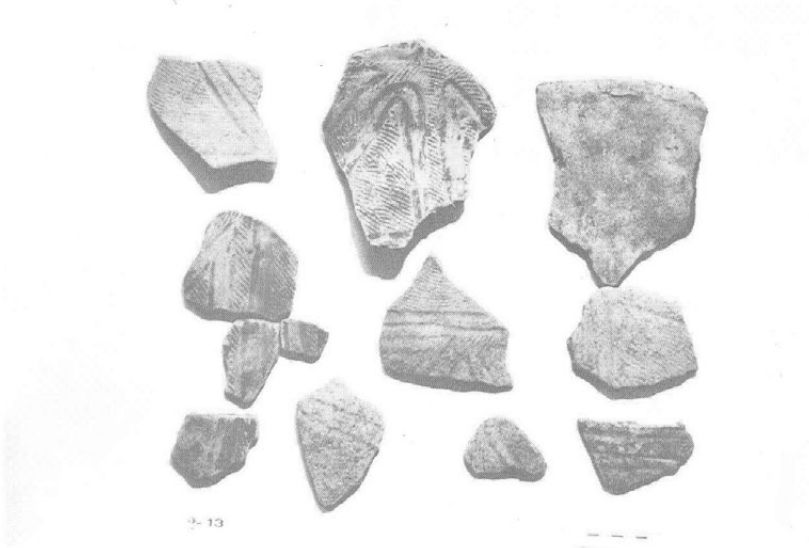
◁縄文式土器 小形品（上）



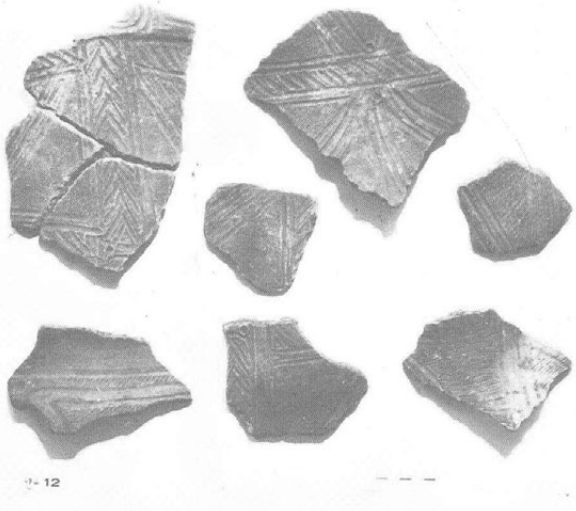
▽縄文式土器（堀之内式）(1)



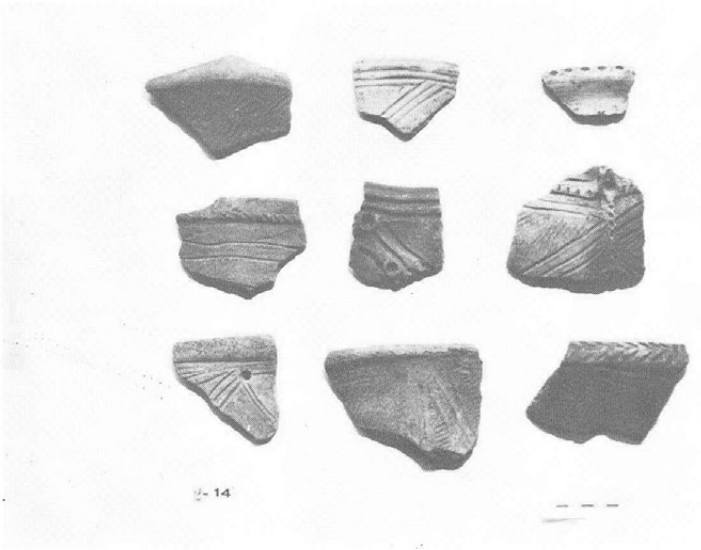
▽縄文式土器（堀之内式）(2)



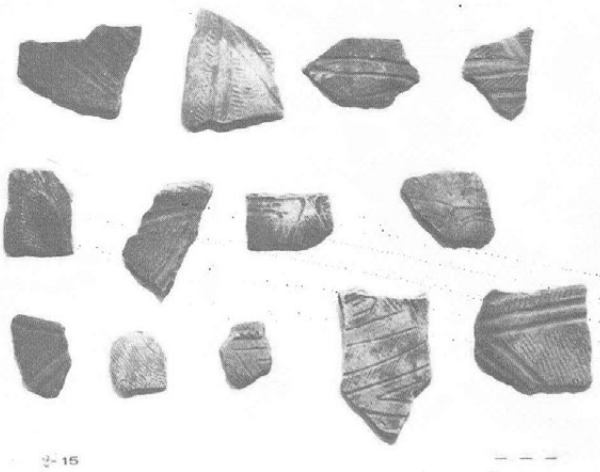
▽縄文式土器（堀之内式）(3)



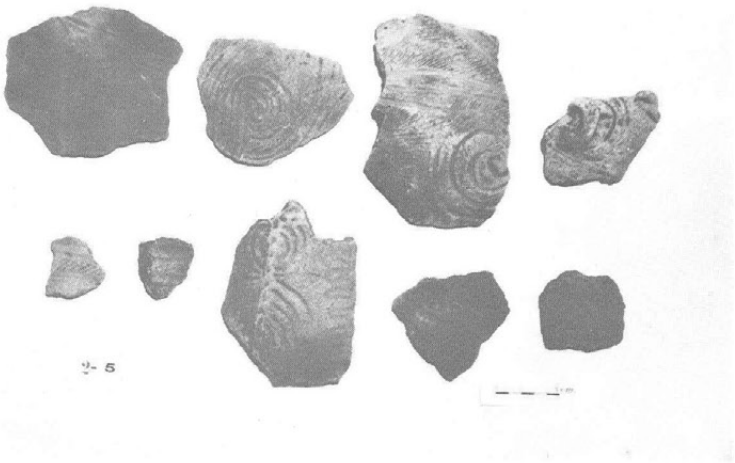
▽縄文式土器（堀之内式）　(4)



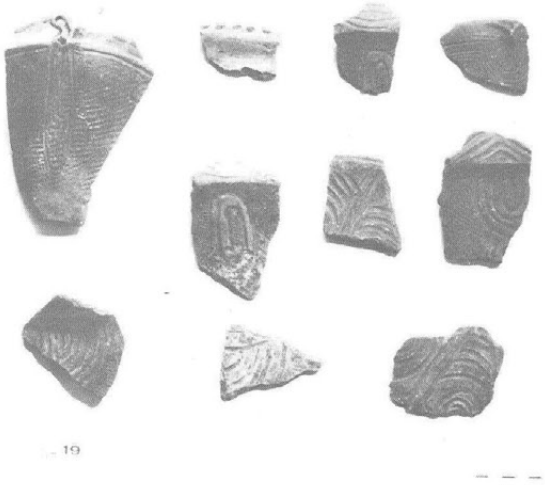
▽縄文式土器（堀之内式）　(5)



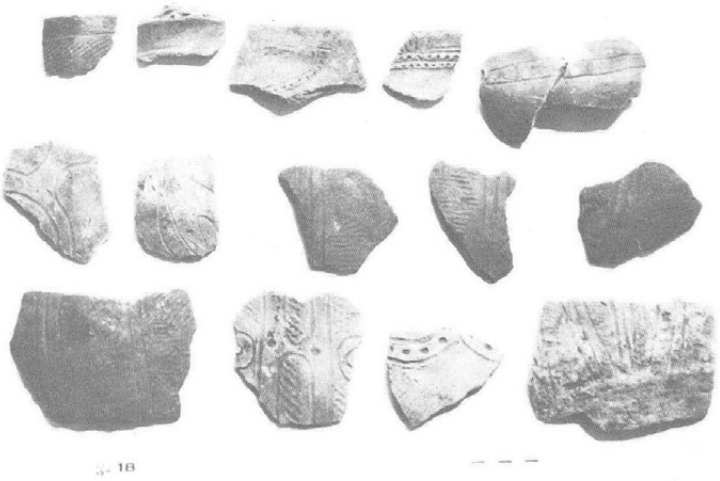
▽縄文式土器（堀之内式）　(6)



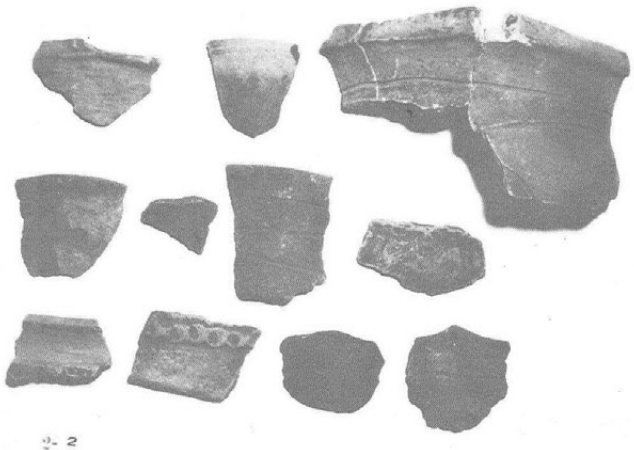
◁縄文式土器（堀之内式）(7)



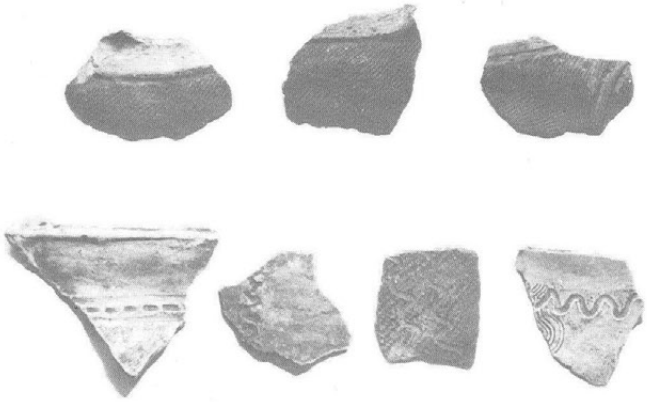
◁縄文式土器（堀之内式）(8)



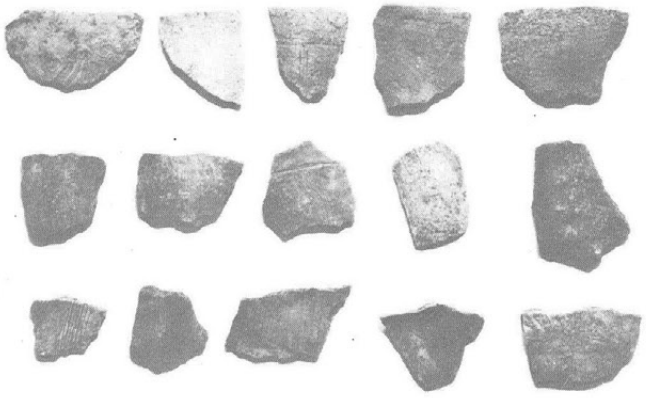
◁縄文式土器（堀之内式）(9)



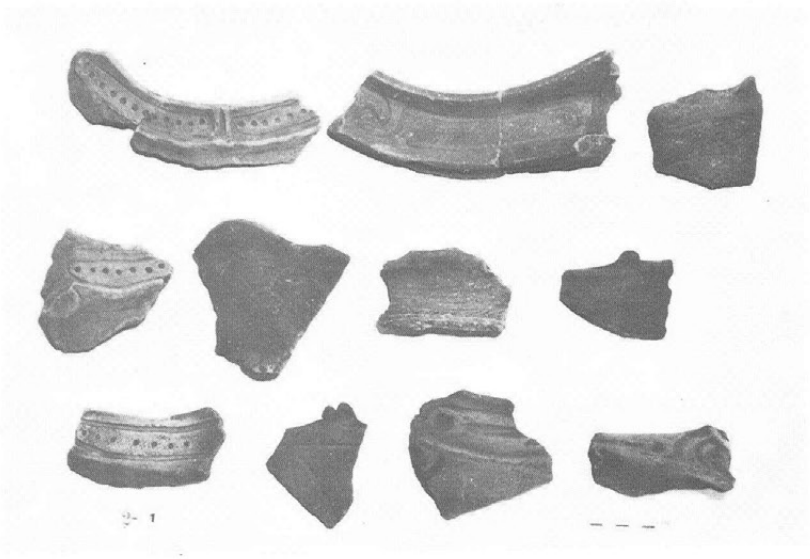
▽縄文式土器（堀之内式）　(10)



▽縄文式土器（堀之内式）　(11)

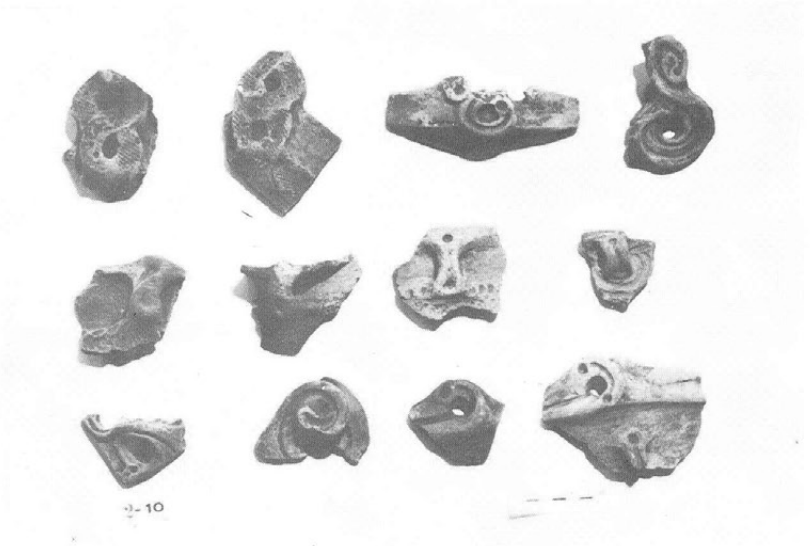


▽縄文式土器（堀之内式）　(12)



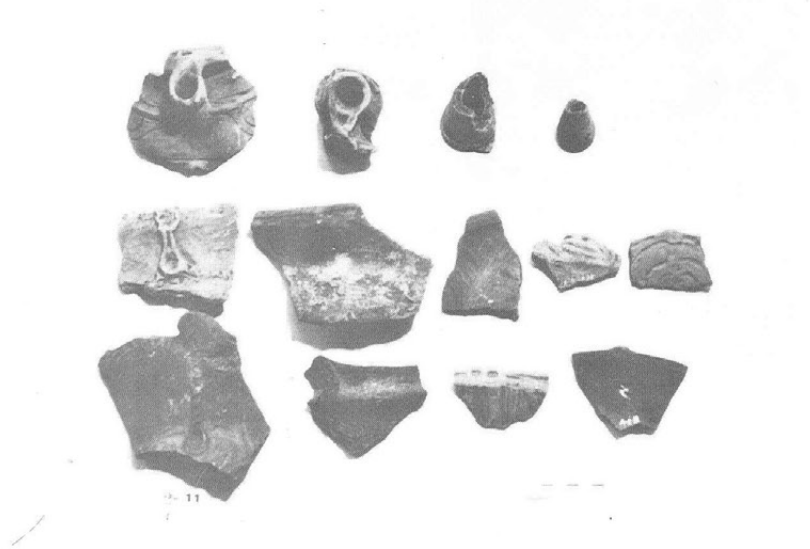
◁縄文式土器（堀之内式）

(13)



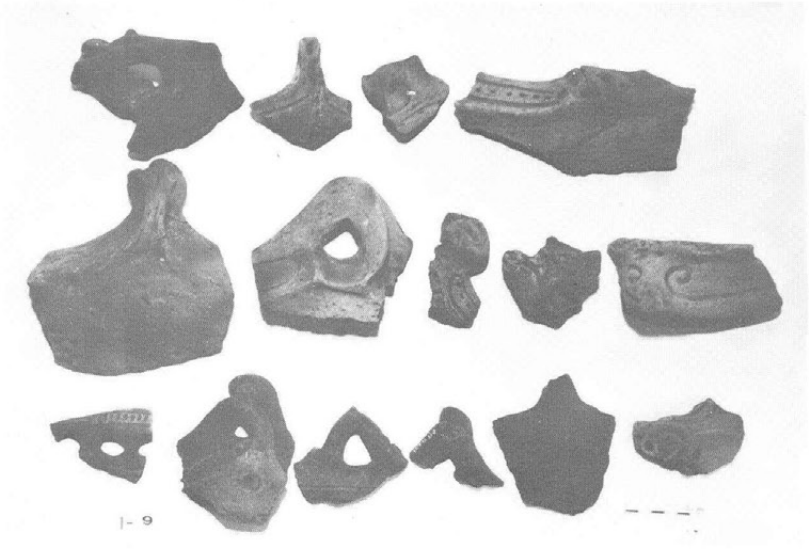
◁縄文式土器（堀之内式）

(14)



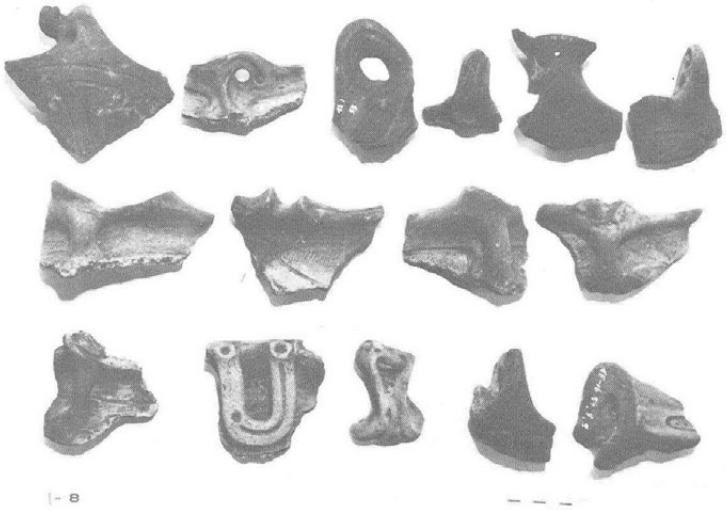
◁縄文式土器（堀之内式）

(15)



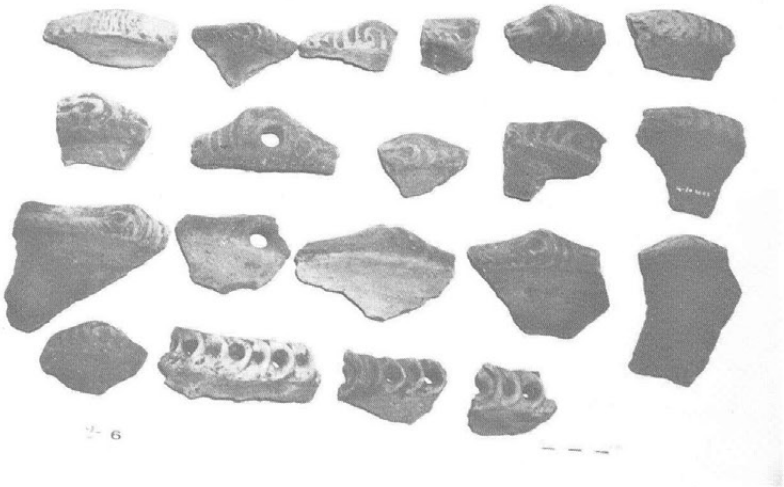
◁縄文式土器（堀之内式）

(16)



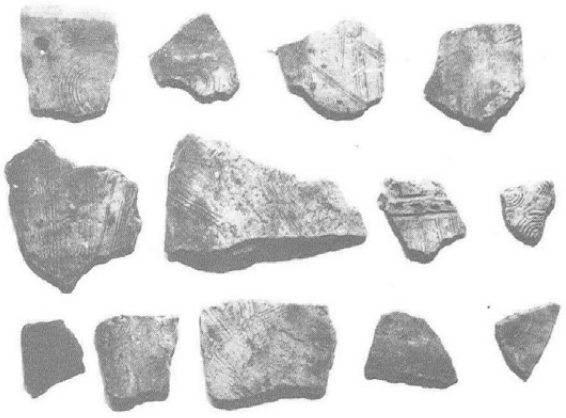
◁縄文式土器（堀之内式）

(17)



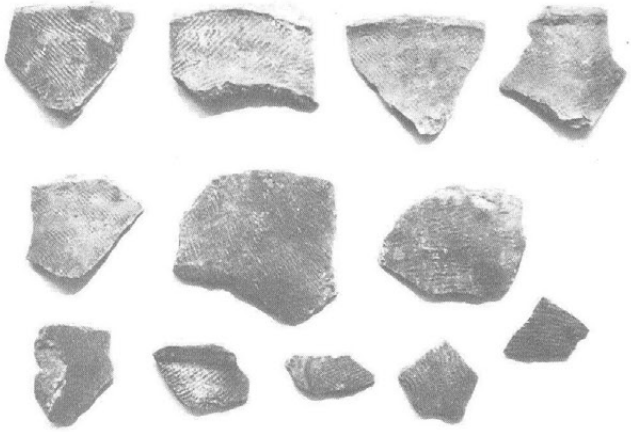
◁縄文式土器（堀之内式）

(18)



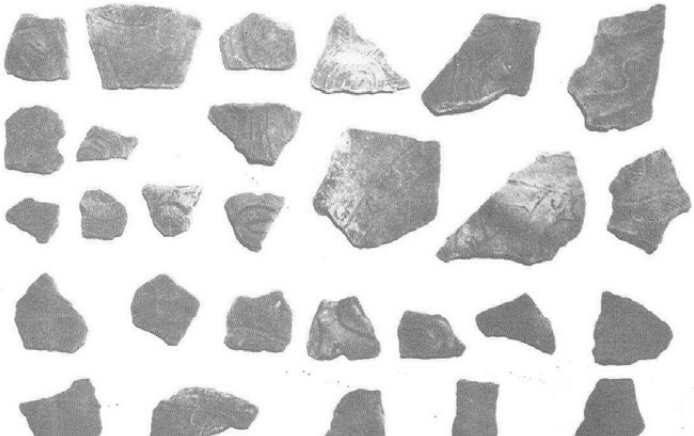
◁縄文式土器（堀之内式）

(19)



◁縄文式土器（堀之内式）

(20)

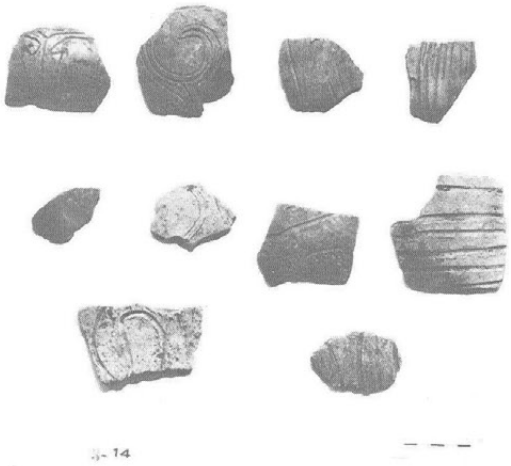


◁縄文式土器（堀之内式）

(21)

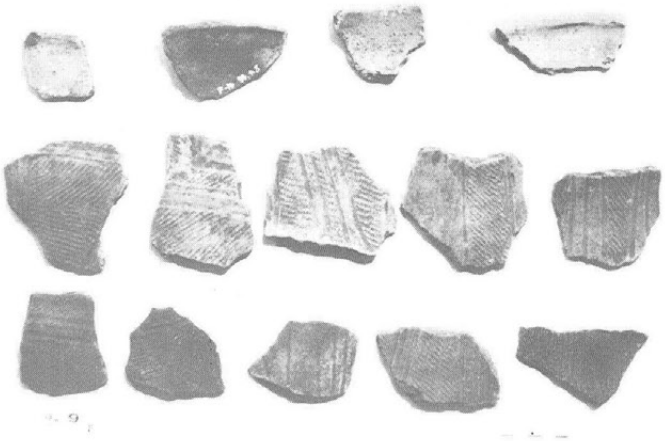
◁縄文式土器（堀之内式）

(22)



◁縄文式土器（堀之内式）

(23)



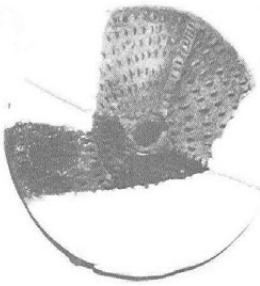
◁縄文式土器（堀之内式）

(24)

B地区出土遺物

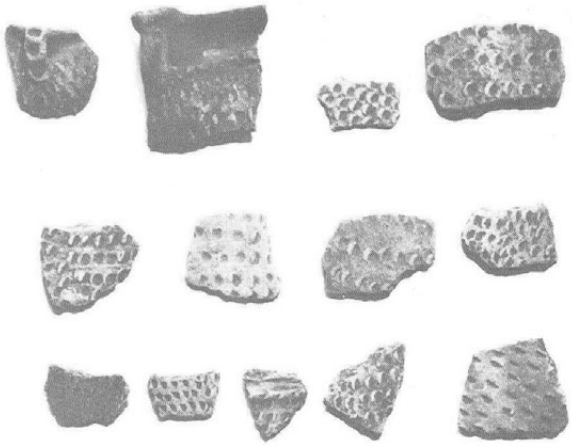
区分	種別	遺物名＼出土位置	第1号住居跡	第2号住居跡	第3号住居跡	住居跡周辺	表面採集	合計
縄文時代	土製品	口縁部	6	5	5	3	37	56
		口縁部把手	2	3	2			7
		胴・低部	183	48	78	44	461	814
		注口部				1		1
		土偶				1		1
	石製品	打製石斧	1		2		1	3
		磨製石斧				2	2	4
		凹石	3	1			1	5
		石皿	9		1			10
		石棒	7	1		2	3	13
		磨製石片	5	1		1	2	9
	その他	骨片				6		6
		焼石				3		3
土師以後	土製品	土師壺				1		1
		土師皿				2		2
		土師盌				1		1
		土師台着椀				1		1
		土師内側黒色椀				1		1
		須恵器片				1		1
		灰釉片				2		2
	石製品	砥石				1		1

（池田実男）

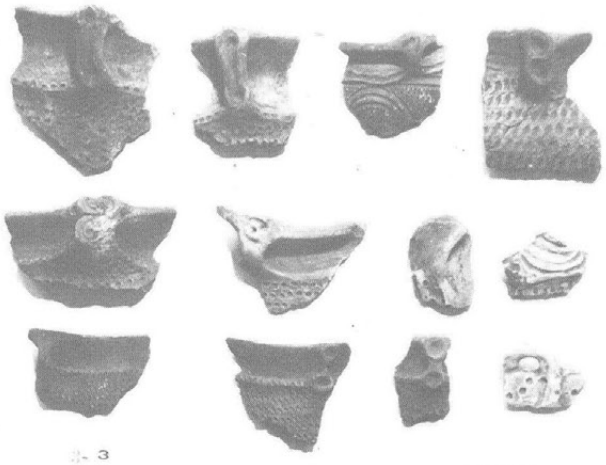


△縄文式土器（三十稲場式）　(1)

△蓋形土器　上は外側で中央のつまみが欠けている。中央から外にむけての凸帯上をはじめ、全面に突刺文がある。下は内側からで中央に小穴がある。

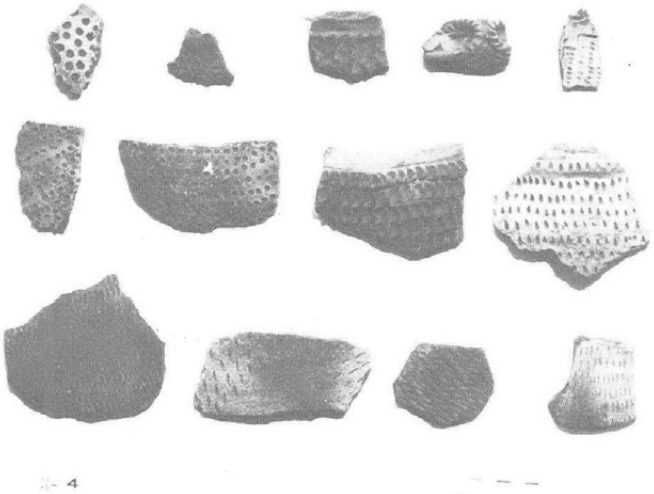


◁縄文土器（三十稲場式）　(2)



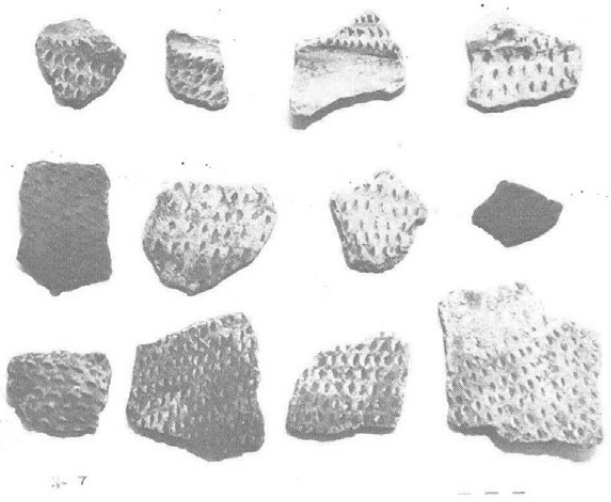
▽縄文式土器（三十稲場式）

(3)



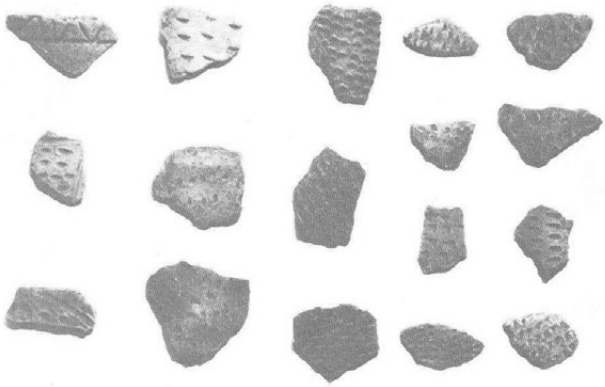
▽縄文式土器（三十稲場式）

(4)



▽縄文式土器（三十稲場式）

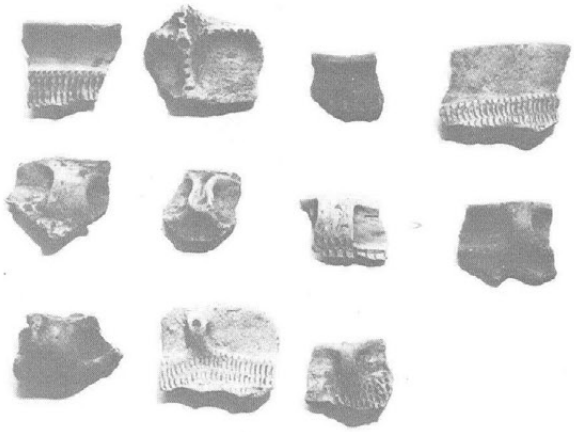
(5)



3-11

◁縄文式土器（三十稲場式）

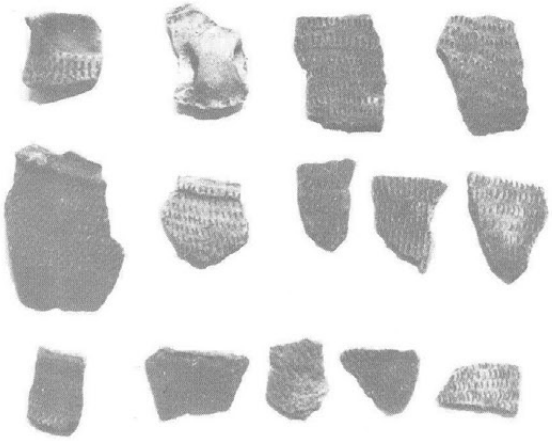
(6)



3-12

◁縄文式土器（三十稲場式）

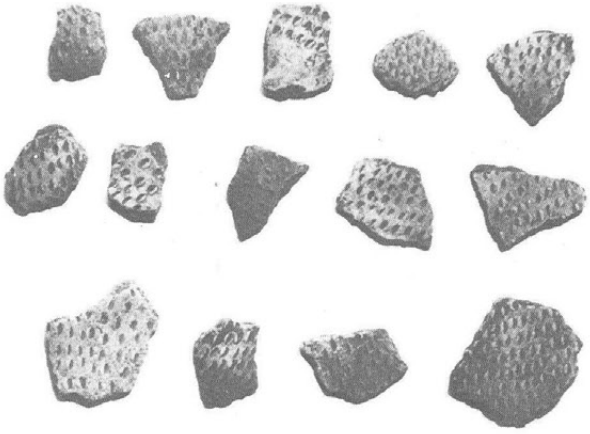
(7)



3-10

◁縄文式土器（三十稲場式）

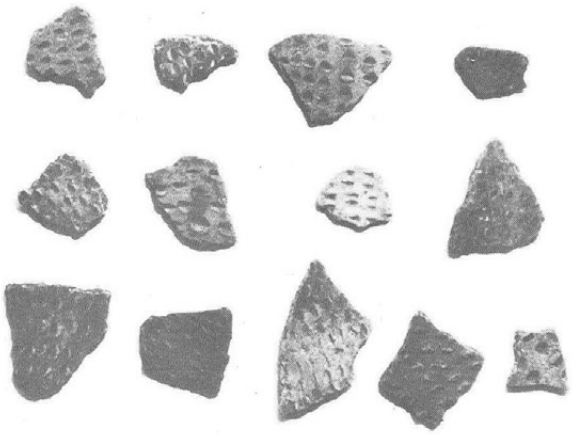
(8)



3-8

◁縄文式土器（三十稲場式）

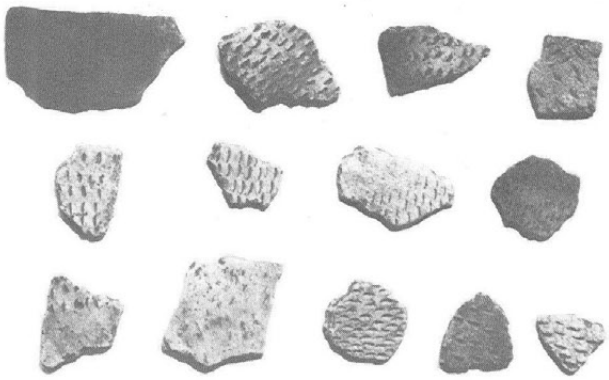
(9)



3-5

◁縄文式土器（三十稲場式）

(10)

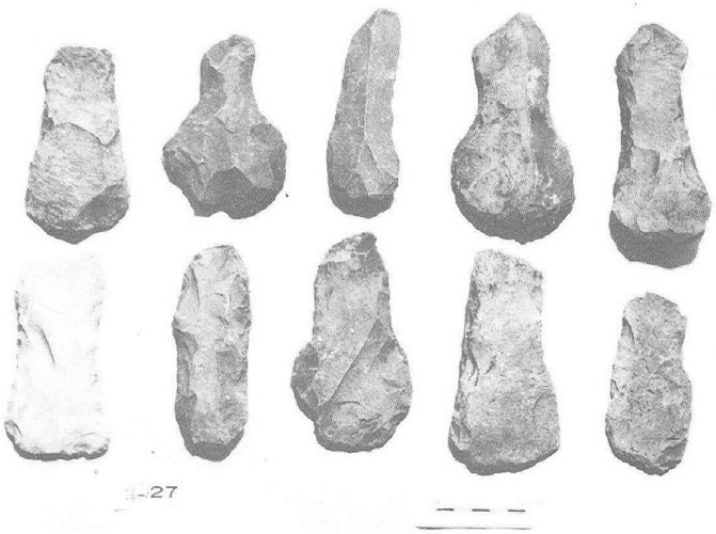


3-6

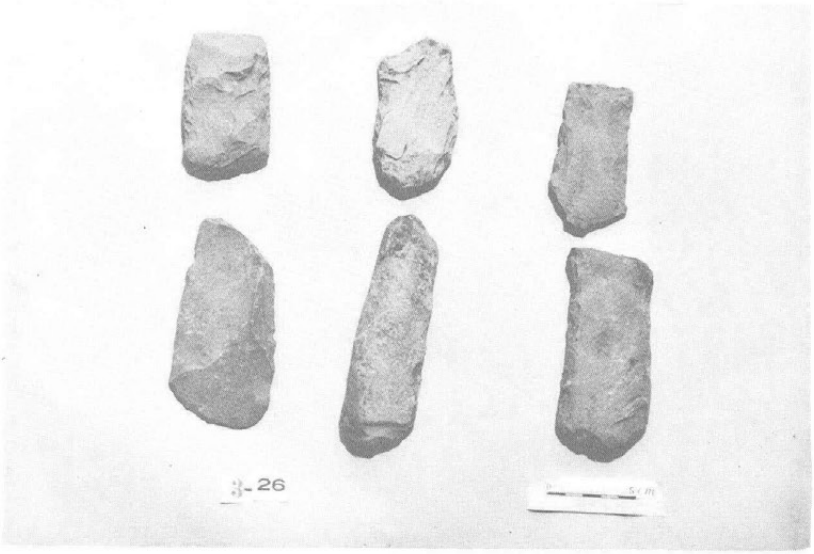
◁縄文式土器（三十稲場式）

(11)

形を分類すると三種となる。上は分胴形、中央は短冊形、下は三味線胴形となる。上・中の二種が多い。



◁打製石斧 (1)



◁打製石斧 (2)

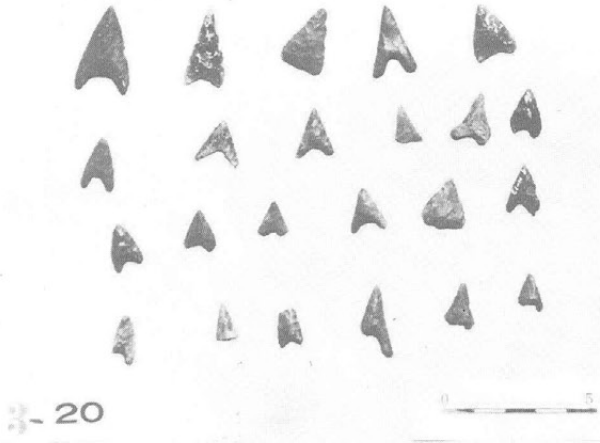
◁打製石斧 (3)

◁磨製石斧

・完形品は一点のみ、右下の小形品は極部磨製の石斧。

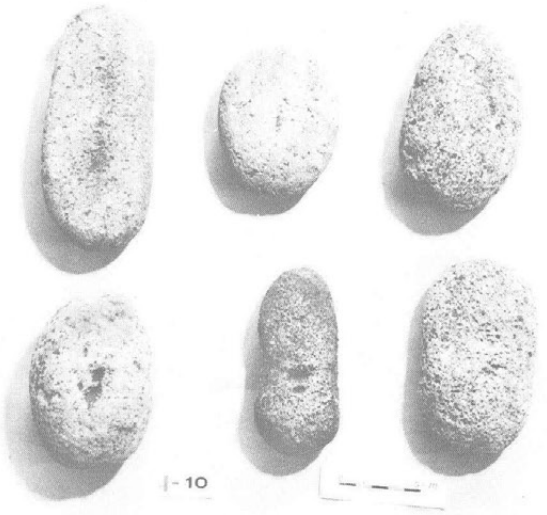
◁小形石器等

・右から石匙・小形磨製石斧二点・小形石皿・下は垂飾、石皿と無飾は同質同色の石材だが、垂飾は石器時代のものかは不明。



◁打製石鏃

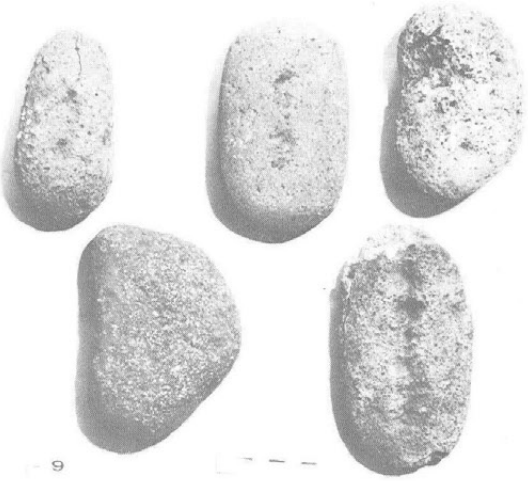
・比較的小形のものが多い、すべて無柄の石鏃。



△凹　石　(1)

△凹　石　(2)

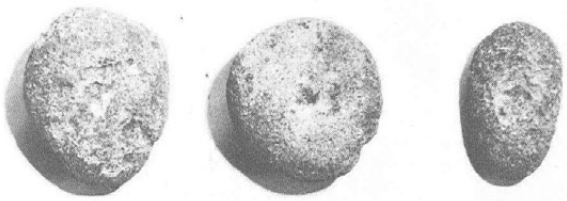
凹石には１孔のもの・２孔のもの・両面にあるものあり。



△凹　石　(3)

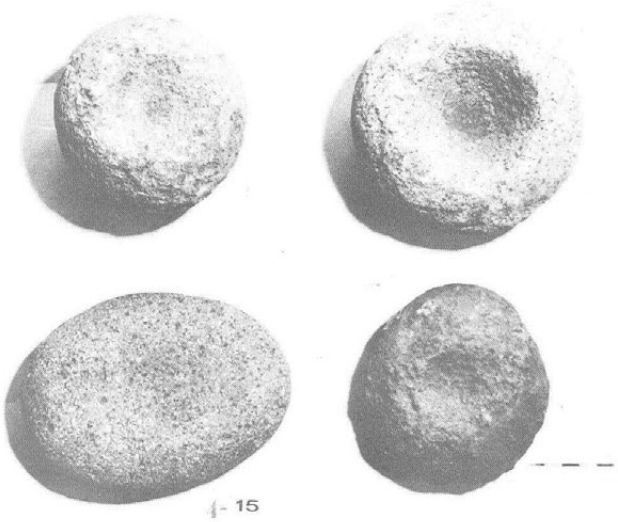
△凹　石　(4)

◁凹石(5)



14

◁石皿状凹石

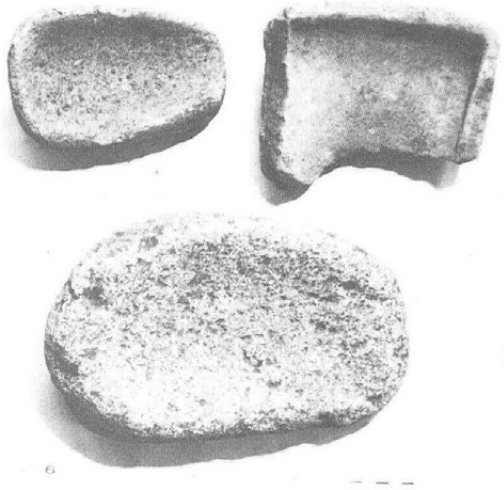


15

◁すり石

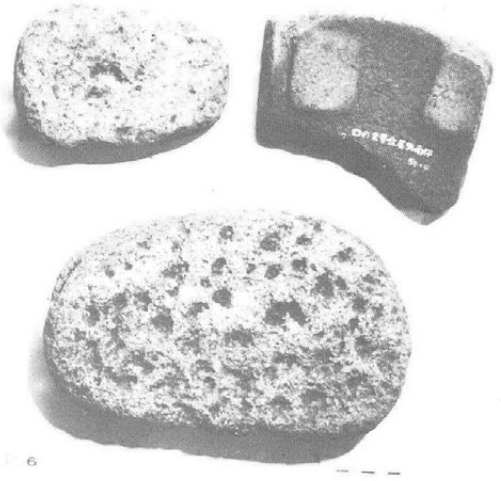
16

・ほとんど球形で、すり石状をなし、つるつるしている。



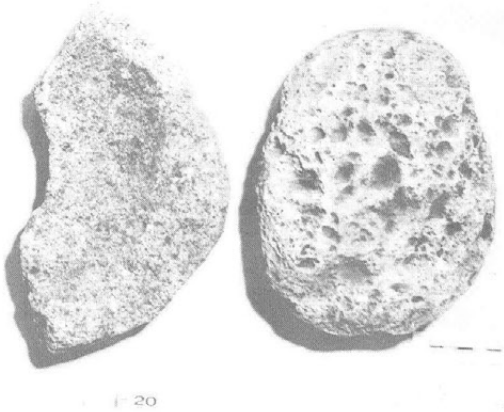
◁石　皿（表）　(1)

・二石皿の表面はすべて磨かれている。左上は完形品で長さ十六㎝、幅十一㎝、厚さ六・五㎝、やわらかい河原石である。



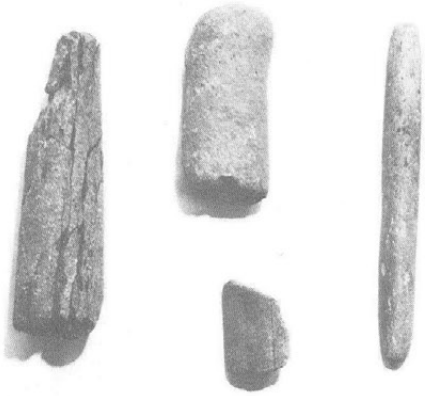
◁石　皿（裏）　(2)

・右上は足部がある。左足部約四・五㎝と五・六㎝の長方形、右足は約四・二㎝と五・五㎝の長方形。共に高さ一㎝である。やわらかい石で表面は風化している。



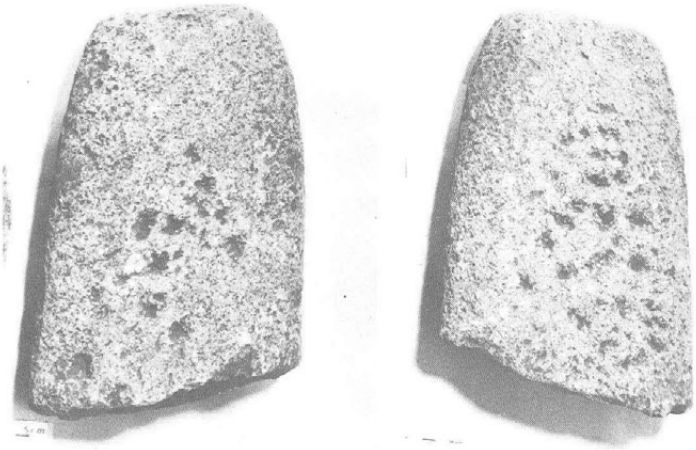
◁石　皿（表・裏）　(3)

・石の裏は様々である。凹石・蜂の巣石等となっている。



・いずれもうす緑色をなす石でやわらかい。左端のものは焼かれたものがぼろぼろで、三十片以上のものをつなぎ合わせた。右端のものは完形品で、長さ二十六・五㎝、中央で径二・五㎝である。

◁石　棒

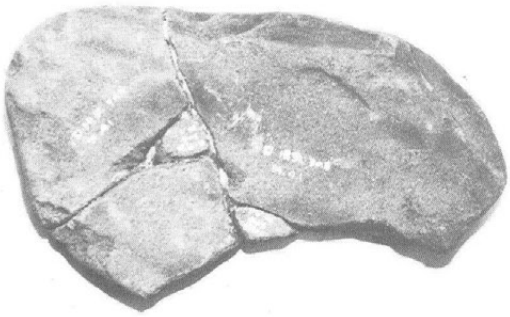


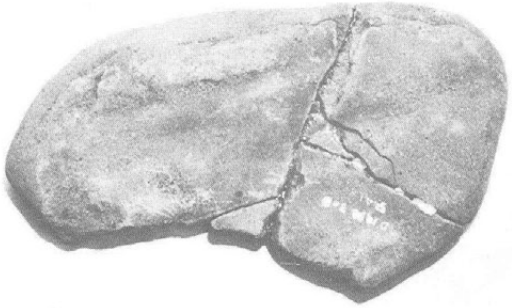
・中央で径十二・五㎝、長さ二十六㎝であるが、下部は欠除している。やわらかい河原石でそれぞれの面に多数の蜂の巣状の小穴がある。

◁石棒状蜂の巣石（表・裏）

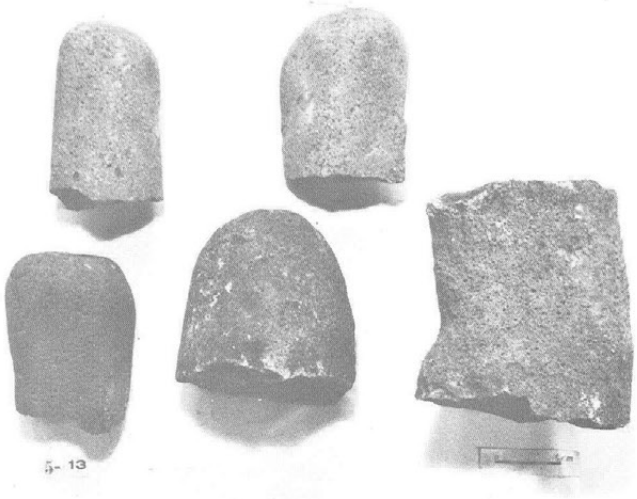
▽砥　石

・砂岩質のもので表・裏共に石皿状をなしている。まわりに数条の凹みをもっている。１部欠除している。

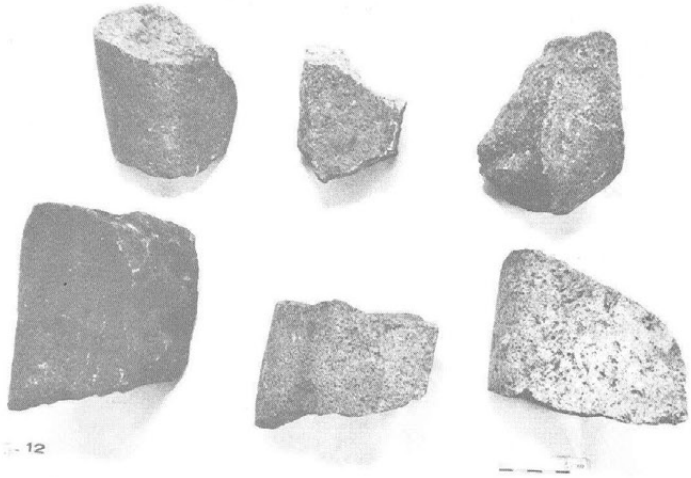




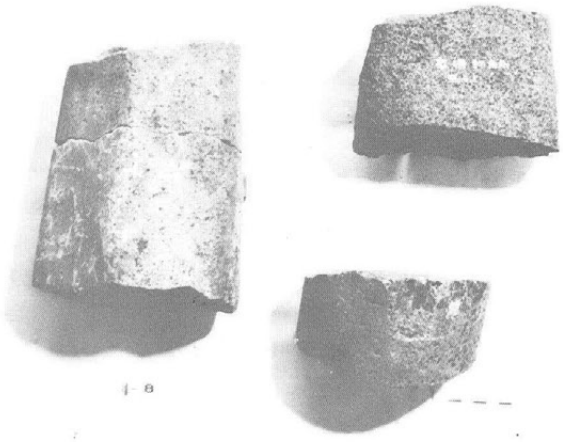
いずれも石の破片であるが、砥石状のものもあれば、石棒状のものもある。



◁棒状すり石片 (1)



◁棒状すり石片 (2)



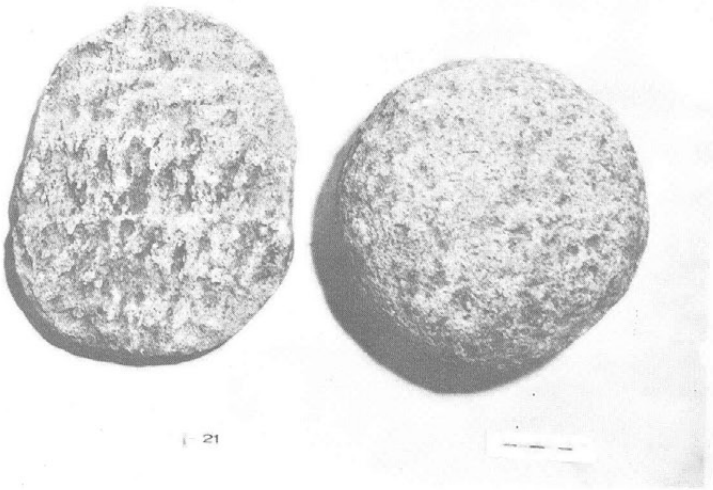
◁棒状すり石片 (3)

◁柱状すり石

・二本とも巨大である。右は約五十㎝、左は四十四㎝である。共に角柱形でそのうち二面が特になめらかにすられている。

◁小形すり石

・上とはやや状態が異なる。一号敷石住居趾より出土したもので、なめらかな石でややかたく、石の一部を欠いているものが多い。

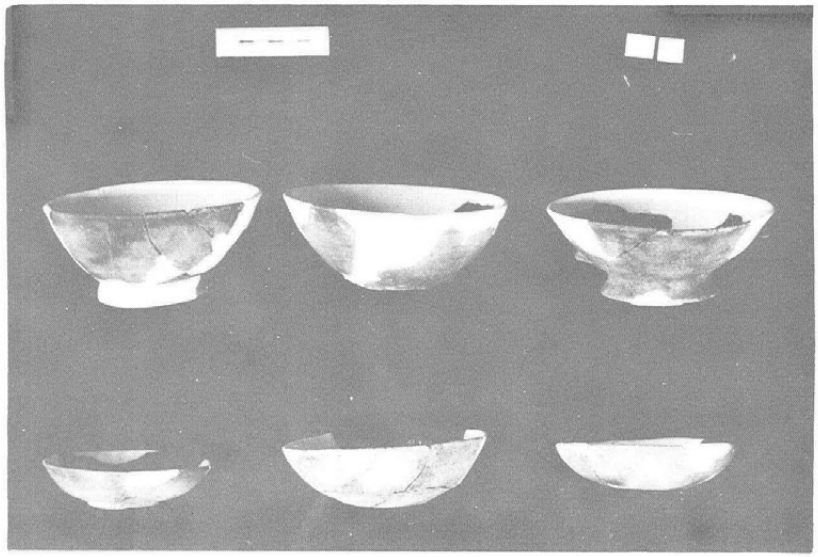


◁蜂の巣状の石

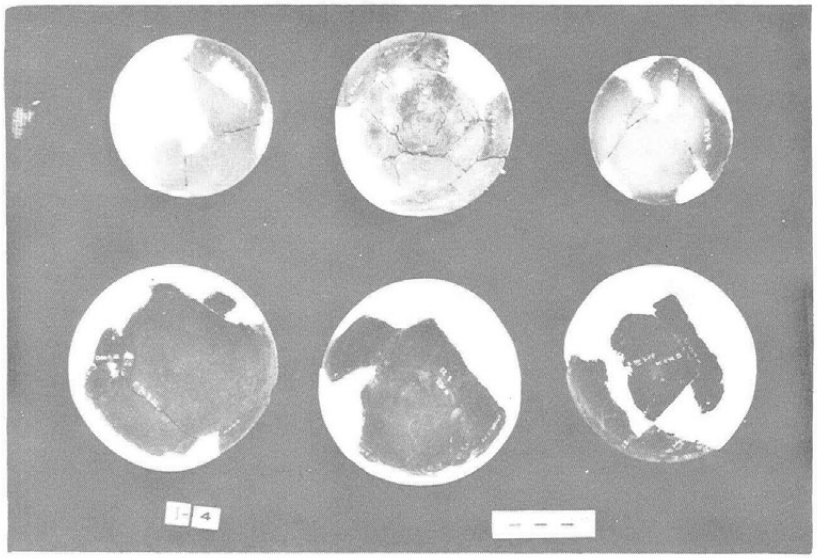
・右は球形・左は平板状の蜂の巣状石である。工作台石的な感じがする。

B地区出土土師器

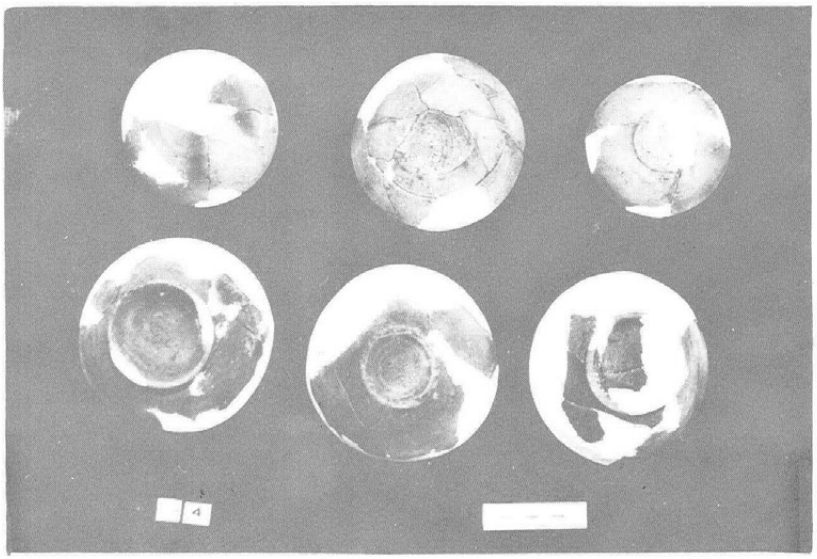
台着土器以外は、低部に糸切のあとがみられる。



◁横から



◁下から



◁上から

V　B 地 区

ここはA地区とC地区のほぼ中間で（第２図参照）、伊勢宮501の25番地の、段丘状の水田跡地である。付近は岩礫が多く、水田の床土の下へ一面に石を敷きつめている。遺跡はその下部に眠っていた。遺構も非常に岩礫が多く、発見された３基の住居趾内は、意図的に安山岩平石や河原石がほうりこまれた状態であった。

１号住居趾

この住居趾は、やや楕円形をなす竪穴式住居趾である。内径は2.5m、短径は2.4mである。柱穴は内壁部にそって５個、外壁にそって11個がめぐっている。しかし２号趾と重なっているため、どちらの柱穴であるのかは不明なのがある。

ほぼ中央にある石組炉は、河原石８個によって組まれている。外形は楕円形をなし、長径約0.8m、短径約0.7mである。内形はほぼ五角形をなし、長尺0.5m、短尺0.4mの炉である。炉はかなり利用したとみられ、まわりの石囲は焼けただれている。特に北西の１個の石は焼けて風化し、くずれ落ちていた。炉内には土器片や焼土や炭化物がかなり見られた。この焼土に混じって、土器片10数点、河原石数個が有った。炉のまわりからは石捧２点、石皿や工作台とみられる河原石等があった。土器は縄文式土器199点、土師器８点等である。

２号住居趾

１号の北西部に近接する略円形の竪穴で径約2.7mの住居趾である。竪穴の外壁にそって９個の柱穴があり、その外側に約10個の柱穴がある。内側の柱穴はやや小さく外側のはかなり大きい。これもやはり１号と重なっているため、どちらに所属するかは不明の柱穴もある。

中央よりやや西に大穴状の炉趾とみられるものがある。長径1.1m、短径0.9m、深さ0.4mで舟底型をなしている。炉趾としてはかなり大きい。上層は約0.12mからの混入物があり、黒褐色の土砂と礫の混入した層である。中層は約0.15mで灰褐色の土砂と礫が混在している。若干の灰化物、残灰がみられる。以下下層は茶褐色礫層で、焼土が多くみられた。遺物は住居趾内南側から、石皿が１点、北側から石捧片が１点凹石１点が検出された。そのほか縄文式土器56点等である。

３号住居趾

内部に、６個の柱穴と外壁に５個の柱穴の発見をみた。２号住居趾と似た配置の柱穴である。柱穴はやや小さい。炉趾はほぼ中央部にあり南西0.7m、南北0.8mで、楕円形をなしている。最深部は0.35mでわん曲していた。焼土や灰化物はごくわずかであった。南壁部やや東より土隅１点が発見された。縄文土器88点と、打製石斧石皿各１点等の出土をみた。また土師器（59頁参照）ほとんどはこの住居趾南西部の付近からである。

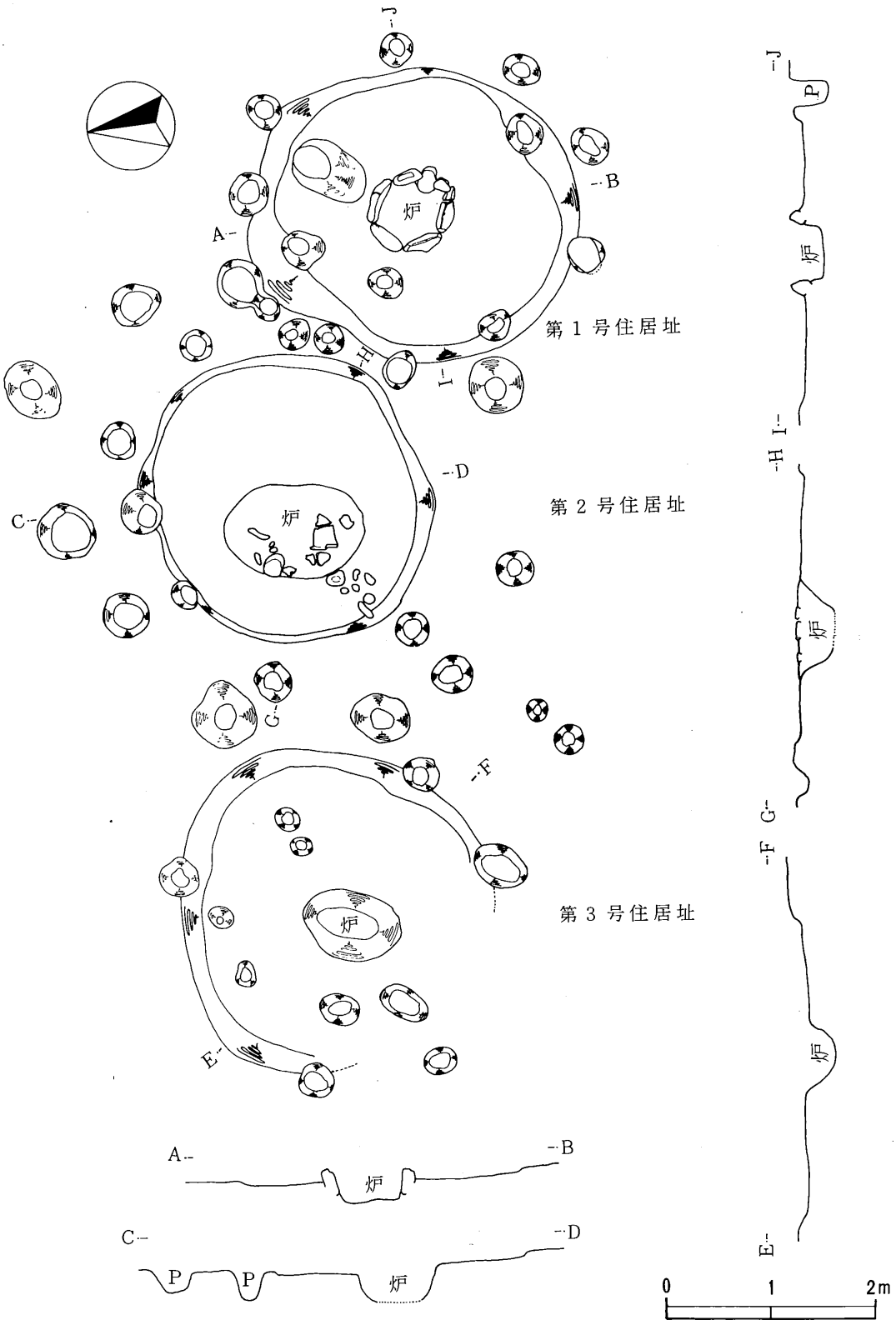
以上３号の住居趾は、中央にいずれも炉趾が検出された。特に１・２号はかなりの使用した痕跡がみられる。また２・３号の炉趾は、かなり大きな炉とみなければならない。

竪穴式住居趾は、いずれも円形に近く、周辺に二重の柱穴があり、内側は小さく、外側は大きいのが特色である。発見された３基の住居趾の時期的な差は若干あるものの、堀之内Ⅰ式土器を主体にしたものであった。しかし完形品は１点も発見できなかった。

住居趾の性格は、日常生活からとらえてみなければならない。発掘途上にみられた住居趾内の安山岩平石や、岩礫の投げこみは何を意味するものか。

また土師後期の糸切り皿等も多数発見されたが、水田であったため表面がかく乱されており、遺物の発見等に留ってしまったことは誠に残念である。

（池田実男）



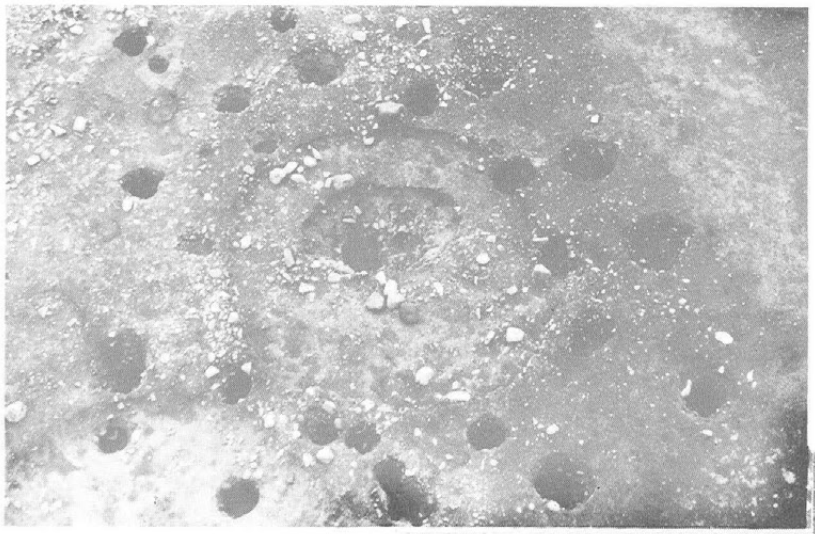
第12図 B地区 住居址実測図1・2・3号（1：180）

△B 地区 住居趾 発掘全景(左から3号・2号・1号)

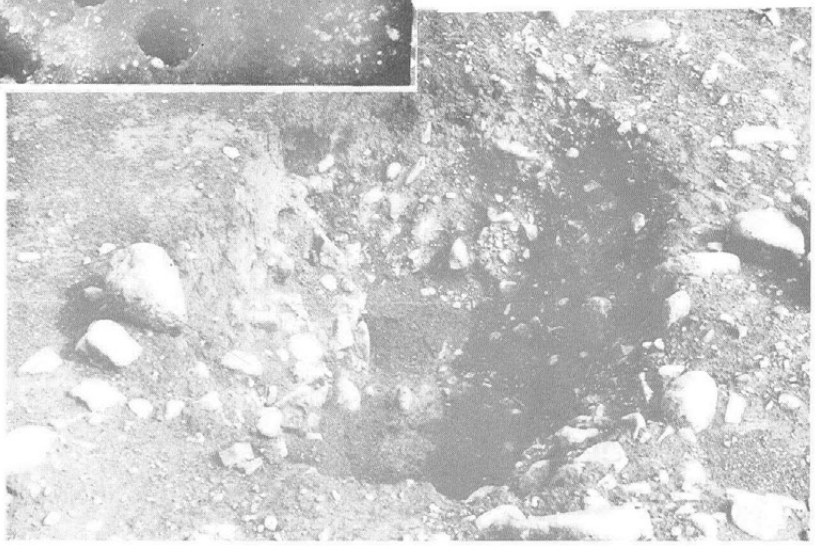
△

◁1号住居趾

▽1号住居趾 中央の炉趾



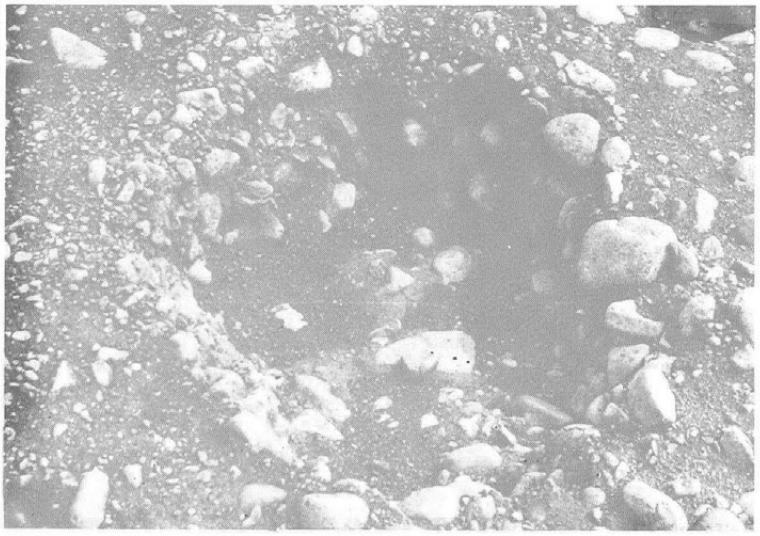
△ 2 号住居趾



△2号住居趾 中央部炉趾

△ 3 号住居趾

▽3号住居趾 中央炉趾



Ⅵ　C 地 区

C地区での注目された遺構は第13図に示す中央に凹部のある、第１群集石遺構とその南西に続いて発見された集石と１対の立石遺構が一体となった、 二群の遺構で、 これらは農構事業に伴ない表土（耕作土）をブルトーザーで削除した結果、研磨された平板石等が露出して注意され、今回の調査となった。この地区の南側の部分を東南から西北に向って遺構上を川が乱流した形跡が認められた。この時混入したと思われる、土師器、須恵器の細片が若干認められたが、ほとんどは、掘之内期に属する土器片で細片が多く、ローリングされ、復原は不可能に近かい。遺構面の土質は黒色の粘土で堅く下層は砂礫層となっている。

C地区遺物集計表

口縁部破片	92	打製石斧	1	凹石	2	石捧状河原石	11
底部破片	57	打製石斧片	1	工作台石	1	灰釉片	1
縄文土器片	1955	石皿破片	1	石製垂飾	1	須恵破片	4
把手部破片	13	ミニ石皿	1	石鏃	3	土師破片	32
注口部破片	1	土偶面破片	1	石屑	8		

第一群集石遺構

中央に角面をつき合せた、平板石を組合せた炉址状の凹部を持ち、周囲の石の表面に磨かれた痕や敲き面のある石など存在したが、凹部からは埋甕や炭、灰などは検出されなかった。

平板石はA地区住居跡使用の石と同じ安山岩で近くの山から運ばれたと思われ、その他の石は現地の石と思われる。

集石中央部のハ字状の石組とその東方向にY字状に石が配列されている点と、南側の配石が孤状になっている点など注目され、柄鏡形の住居址、祭祀の配石跡かの究明は今後の課題としたい。

第二群集石立石遺構

発掘当初、一群の集石遺構として注目されたが、注意して集石を取除くと第15図の如く立石と前庭敷石の遺構が１対となって現われた。

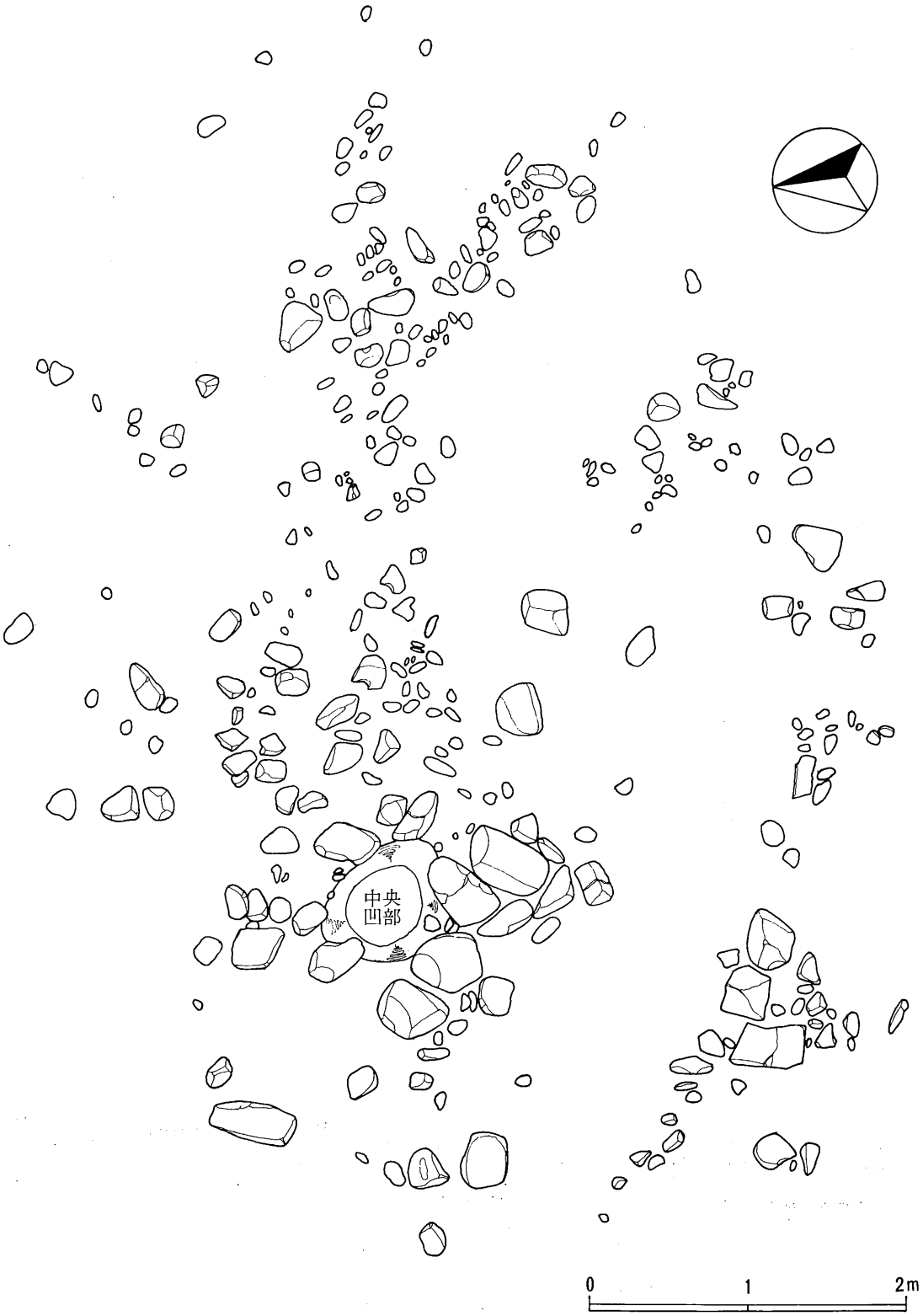
S_2 立石(東南側) を中心にした側に集石が多いのが注目される点で、大は0.3m内外の石から0.8m内外の石が使用され、深さ約0.3m 、周囲直径1.5m の範囲に集められていた、中に若干堀の内期の土器片が認められた外は他の遺物は認められなかった。

S_1 立石(北西側)は直径0.35m×0.3m、長さ0.57mで前庭に平板石が1個据えられ周囲を長方形の石で囲んでいる。

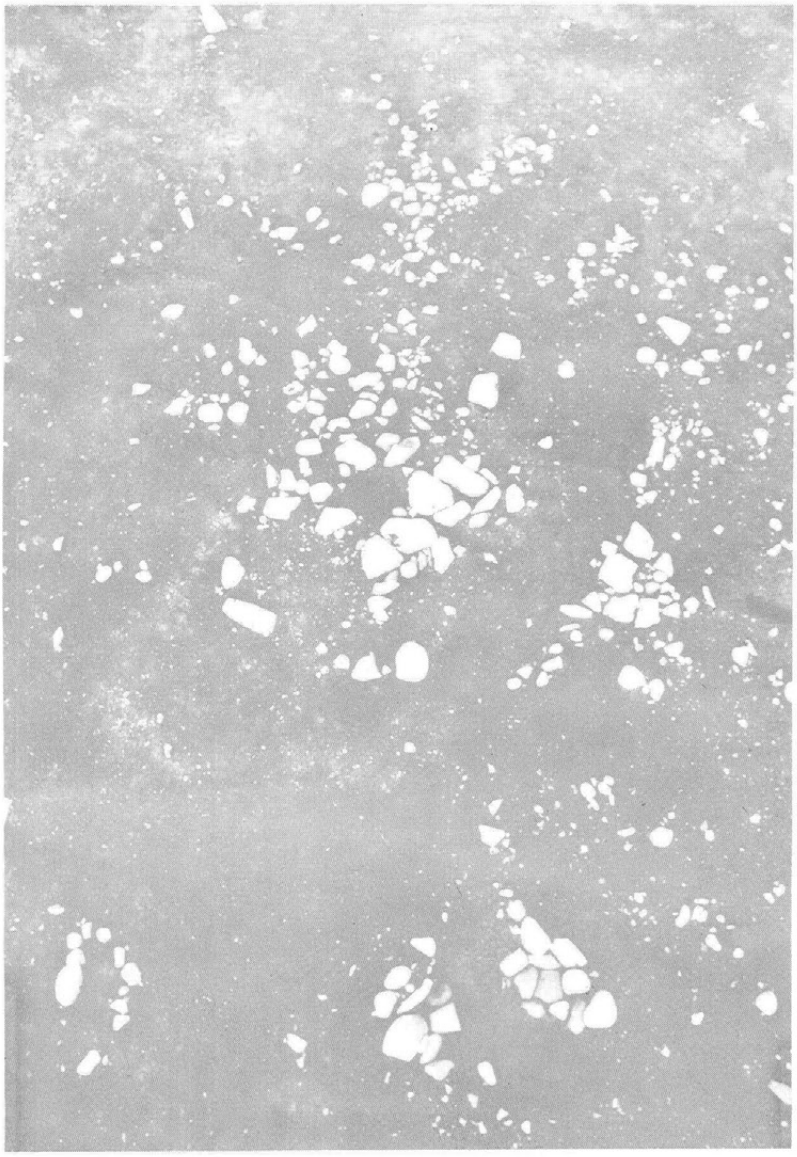
S_2 立石はS_1 立石と1.12m離れて１対の存在で確認され、直径17cm、長さ50cm程の細長い河原石で、前庭に５個程、平板石を据えている。加工はされていないが S_2 立石は男性器と見られても仕方が無い形状を示している。

このS_2 立石の方向には、志賀高原の笠岳（2076.8m ）が遠望され、円頭形の山容が類似している。S_1 立石の方向は高社山（1351.5m ）と斑尾山（1381.8m ）との中間に向っており、現在の夜間瀬川の流路と合致する。この様な事から第二群集石立石遺構は(1)子孫繁栄の願い、(2)斎庭に供え豊猟、豊漁の祈り、(3)人的や物的な交流の問題など後期時代人の信仰や精神生活やその背景の社会が想像されるが、これらを示す好例として興味ある遺構として記憶されるべきであろう。

（檀原長則）



第13図 C地区 第1群敷石遺構実測図（1：180）

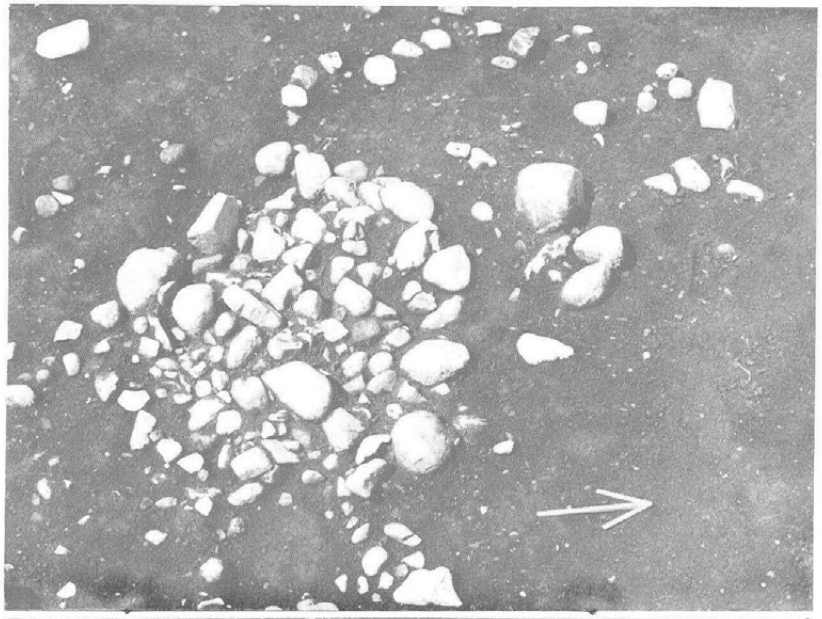


◁C地区遺構 配石敷石遺構（上）と配石立石遺構（下）
中央凹部を囲む石とハ字状の石組。Y字形の配列、弧状をえがく配石、右下に立石状遺構が見える。

◁敷石遺構 中心部
・中央が凹状となり周辺に平らな石で囲っている。

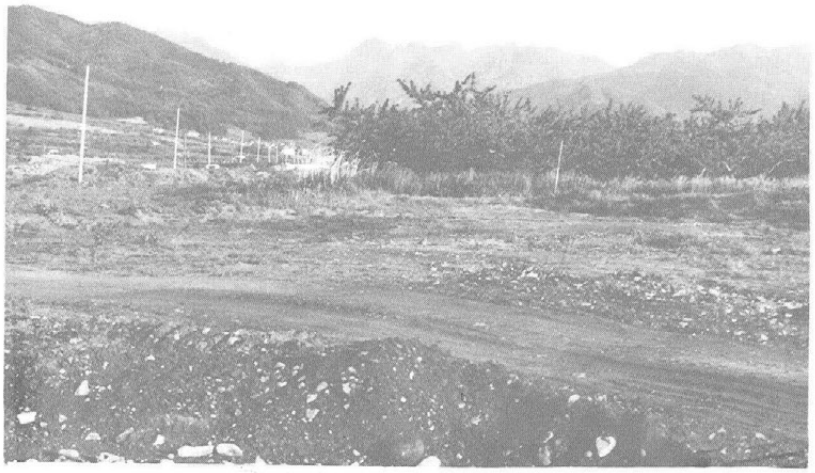
集石立石遺構

・表土を除いた時点でS_1立石が、中央右上寄りに群と離れて四個の石と見える。
・S_2立石は集石の中央南側部分に囲まれた状態で存在している。

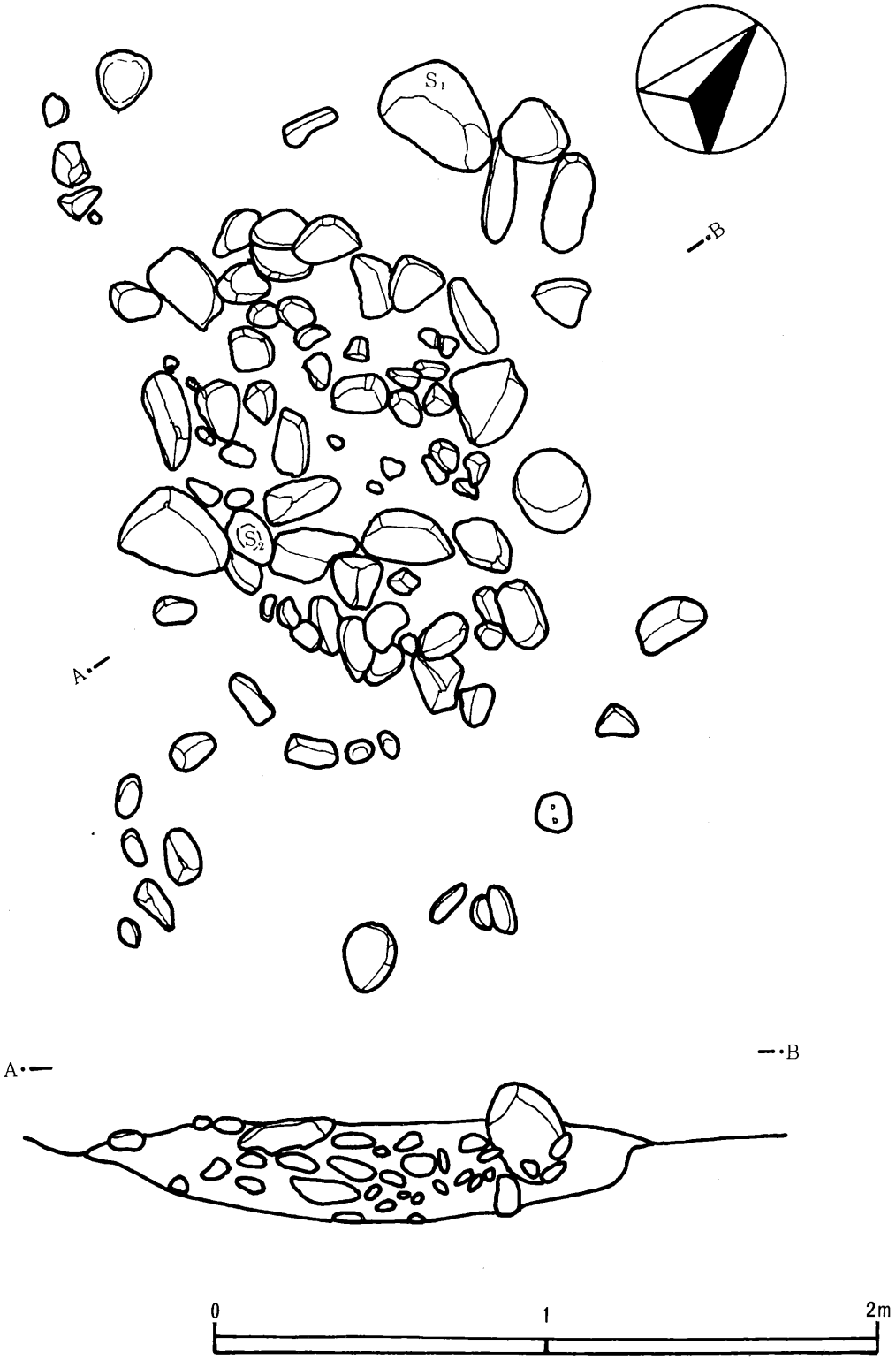


◁集石立石遺構（矢印は北を示す）

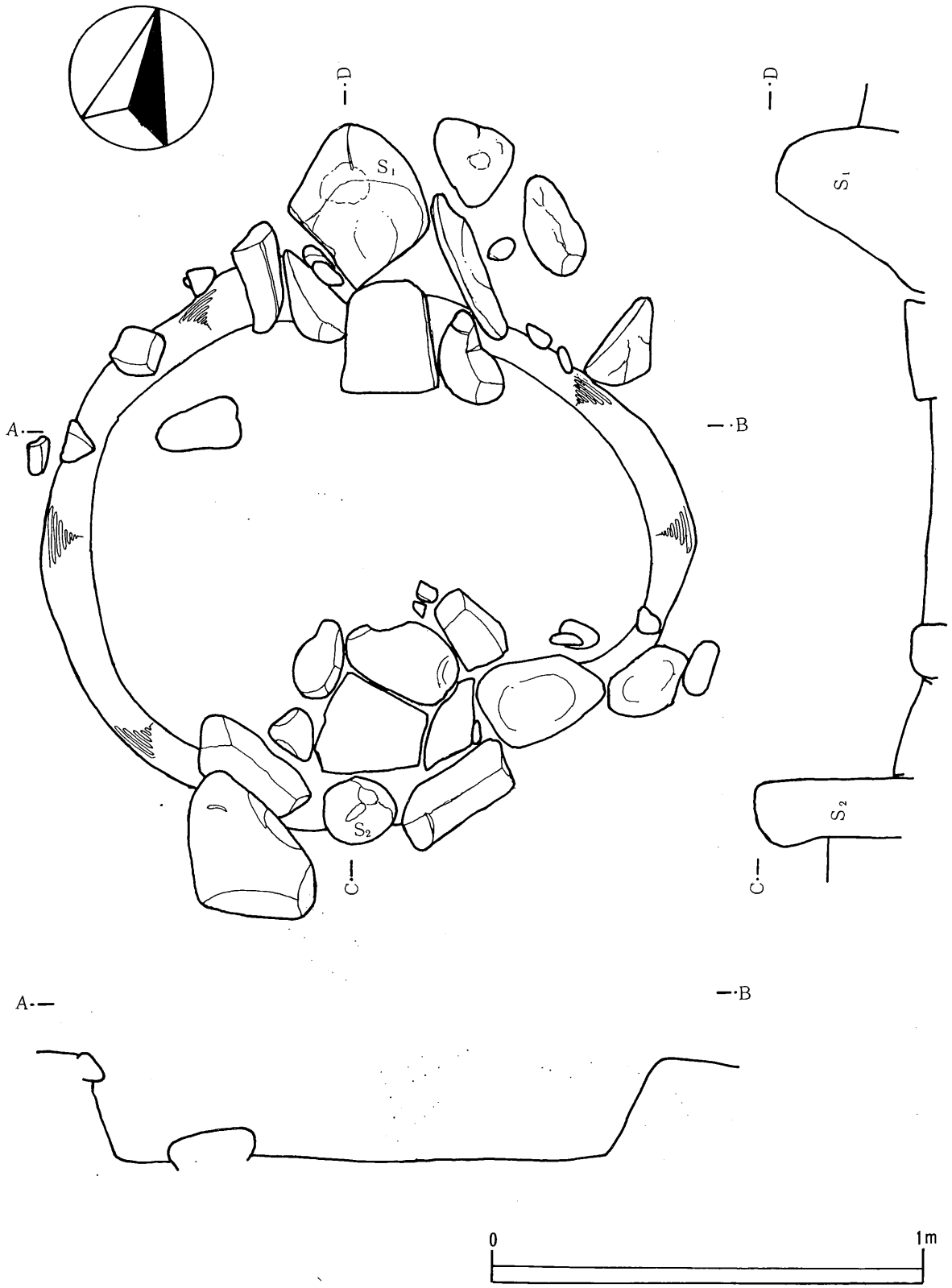
◁集石内立石遺構（右S_1・左S_2）



◁中央凸状の山が笠岳
・S_1・S_2を結んだ方向に笠岳がある。

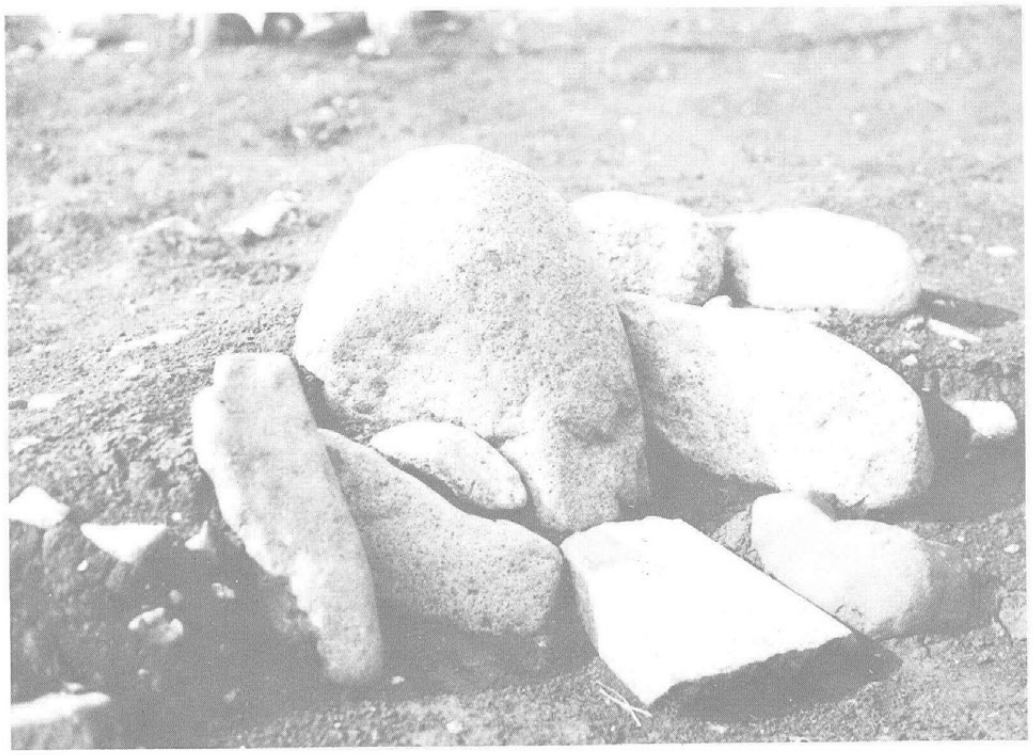


第14図 C地区 集石遺構実測図（1）



第15図 C地区 集石立石遺構実測図(2)

△集石内南側立石（S_2）



△集石内北側立石（S_1）

Ⅶ まとめ

伊勢宮遺跡の今回の発掘は、本郷区の圃場整備事業に伴うものである。昭和53年10月の山ノ内町教育委員会の事前調査では、伊勢宮2945―1の一部から若干の土器が出土するので、年内に調査してほしいということであった。

準備がととのい、調査を開始したのが11月にはいってからである。その結果この報告に記載した、第2号の柄鏡形敷石住居趾と、1号孤状列石が検出された。この発見によって、ここは単なる遺跡ではなく、多くの謎を秘めた遺跡であることが示唆された。

一方圃場整備事業が進むにつれて、方々から遺物・遺構構の発見もあり、真冬に向かっての発堀のため、一時発堀を中断せざるを得なかった。よって翌年3月発堀を再開し、5月に発堀の完了をみたのである。

発堀の成果は、各調査員の報告にもある通り、縄文時代後期前葉の遺物・遺構である。遺構では、A地区の柄鏡形敷石住居趾2基・広い配石遺構1カ所・孤状列石2基・土坑のない集石3基・配石土坑28基・その他ピット多数。B地区からは、竪穴式住居趾3基。C地区からは、柄鏡形敷石住居趾1基、配石土坑1基等の検出である。また遺物として、土製品39,964点・石製品 709点・その他 516点・合計41,189点の多量に及んだ。

今回の調査を一口にまとめて言うならば、この遺跡は、縄文時代後期前葉の住居趾と配石遺構を中心にした遺構・遺物をもつ祭祀の遺跡であって、当地方では、数少ない縄文時代の重要遺跡であることが確認された。調査の細部にわたっては、各調査員の報告で明らかであるが、若干の私見を述べまとめとしたい。

検出された祭祀の配石遺構は、縄文時代中期以降の後・晩期においては、関東・中部地方から、東北・北海道にかけてである。しかしながら配石遺構に関連する敷石住居趾のうちの、柄鏡形に寄せてみるならば、更にその分布もせばまり、関東山地から中部山地に向けて主体的に受容されるものである。

当遺跡発見の敷石住居趾は、中部地方における最北端の敷石住居趾とみてきたが、その後新潟県に三例確認された。そのうち、津南町沖ノ原の敷石は多角形であって、当遺跡の2号敷石住居に類似するが、柄鏡形であるかどうかは確認できない。また同遺跡の第2号住居趾は、敷石はないものの、住居趾内に柄鏡形の部分があり、注意をひいた。県内の近例では上高井郡高山村坪井・上水内郡三水村小野に例があり、飯山市桑名川もその痕跡がある。しかしこれらは柄鏡形でなく、県内では、小諸市郷土・北佐久郡軽井沢町茂沢など数例を数えることができる。数少ない事例から伊勢宮の三例の発見は快挙といいたい。

1号敷石住趾の張出部の土坑からは石棒状石が、また出入口部の土坑からは細長い凹石状石が検出された。ここからは埋甕や幼児骨などの検出はなかったものの、この石製品は好事例となり得る。2つの土坑のすぐ隣りには、ピッタリ合う蓋石が横に置かれていた。蓋石と土坑内の2つの石製品は何等かの意味においての墓址祭祀か信仰祭祀とみたいのである。

A地区の二つの敷石住居趾は、若干の時期のずれはあるものとみられるものの、同一方位にある。即ち1号の2つの土坑と炉を通したライン。2号は張出部前の土坑と、出入口部のすえ付の石皿と中央の炉を通したラインは共に同一方位である。共に志賀のΩ状突出の笠岳（2076,8m）に向けられている。一方の下方は、遺跡を流れる泡貝川や夜間瀬川の谷間に向けられている。その方位と地形から、山岳信仰や豊猟と谷川の豊漁の願いがうかがえる。この例は屋内祭祀であるが、屋外のC地区の集石土坑にもみられる。ここからは、男女を標示す立石がある。子孫繁栄という願いだろうか。しかしその方位もまた、敷石住居趾と同様な方位にある。山梨県大泉村金生遺跡の立石は八ケ岳と富士山に向けていた例からも山岳信仰説も有力である。

A地区の敷石住居とB地区の竪穴住居跡は、柱穴が住居趾の周壁部にそって外側と内側にみられる。A地区の2号敷石を別とすれば、共に内側の柱穴は小さく、外側は大きい。一般にこの期の住居趾では外周に柱穴がみられないのが普通である。南安曇郡穂高町離山の住居趾も、外周に柱穴がみられここと類似性がある。すでに遺跡の

位置や環境のところでも取り上げた如く、伊勢宮のように、山背風の吹きさらす地帯での特殊例を示すものか。現に柄鏡形住居趾も地形を生かし張出し部は、風を直接受けぬ東（C地区住居趾）まはた西(A地区住居趾)方に若干寄せている。また北側の柱穴の方が大きく、また数も若干多くする工夫もみられる。竪穴の住居（B地区の住居趾）の炉も大きく、焼土も多く寒さに対する防備の工夫がみられる点にも注意したい。

今回発掘された土器をみると、堀之内1式を主体に、三十稲場式の土器がかなり認められた。当遺跡からの三十稲場式の発見は初めてである。この式の土器は、新潟県を中心に東は山形・仙台にまで分布をみせている。県内では、飯山・中野・須坂にも及び、その末端は、上水上郡信州信町宮平にもおよんでいる。当遺跡の三十稲場式は、三十稲場のそのものを受け入ている。即ち文様では、口縁部、低部の一部を除き、突帯部にも突刺文をほぼ全面に施している。口縁近くにかんたんな把手を附し、どちらかというとずんぐり形の甕形の土器であろう。

また中央につまみを附した蓋形土器もあり、文様は器部と同様である。33頁下は堀之内と三十稲場式の同時出土の好例である。両文化が共に受け入れられた遺跡である。したがって、伊勢宮独特な遺物の発見は特に確認できなかった。

2号土坑墓と2号敷石住居と1号列石は、一連の関係のものであろう。住居跡の張出部前に土坑のある例は多摩市道1,458号線をはじめ他に類例もある。ただこの遺跡の土坑墓は、人頭形の石の首すじへ石の先端を突刺した状態は無気味である。また住居趾前の1号列石の東端に立石をし西に向かって伸び、列石は住居趾に接近し、そして西端部では列石が抜かれている。そして第1号敷石住居趾によってさえ切られている状態がある。以上3者は屋内祭祀と屋外祭祀の一連の関係でとらえるべきであろう。

このほか、なぞめいた遺構・遺物は多くある。例えば、A地区の小集石の遺構の焼け石のひび割れは、何を物語るかである。食物調理場か祭祀かの問題を解く資料は現状はとぼしい。ここでの明らかなことは、敷石住居を含んだ各種の配石遺構は、墓趾的や信仰的な遺構の祭祀遺構である。ただどのように位置付けていくかは、今後の研究にまたねばならないことが多い。長野県内にはこうした敷石住居や配石遺構の関係遺跡は、時期的な差異はあるが、縄文中期末から後・晩期にかけて主体に百十余カ所確認されているが、その実態の解明は充分とは言いがたい。ましてや、当遺跡の研究もこれからが出発点である。

終わりに発掘調査に関する問題点を取り上げるならば、発掘の時間に制約があったり、経験不足のための調査であった。しかしながら、夜の明けるのを待っての現場視察や、降雨後の見回りから、土壌の自然の姿を見つつ、柱穴・土坑・住居趾の区画を確認することができた。「発掘は終わる頃になって新発見があるが如く」であった。関係各位の協力に感謝しつつ、また研究者各位の今後の指導をお願いしたい。　　（田川幸生）

主な参考文献

ア　秋元　真澄　1977　「第3章遺構」「沖ノ原遺跡発掘報告書」　津南町教育委員会

コ　小松　　虔　1961　「長野県東築摩郡　波田村葦原遺跡第1・第2次調査概報」　信濃第18巻第4号

ナ　中島　庄一　1978　「縄文時代」　多摩市道1 458号線遺跡昭和53年度調査報告
多摩市道1,458号・1,461号線遺跡調査会

中村・稲田・金子　1970　「上並松遺跡」朝日百塚・並松遺跡　越路町教育委員会

ミ　宮下　健司　1979　「長野県内出土の敷石住居・配石構一覧表」　信濃考古ほか

ム　村田　文夫　1975　「柄鏡形住居址考」　古代文化202

モ　森嶋　　稔　1978　「信州新町の考古学的調査」　信州新町史

森嶋　　稔　1980　「八ケ岳南麓大泉村金生遺跡見学記」　しなのろじいNo.100

ヤ　山本　暉久　1976　「敷石住居出現のもつ意味」　(上)(下)　古代文化

山本　暉久　1981　「縄文時代中期後半期における屋外祭祀の展開」　信濃第38巻第4号

ヨ　与良　　清　1974　「第1章小諸の黎明」　小諸市誌考古編

山ノ内町夜間瀬伊勢宮遺跡調査会

調査責任者　村上　富吉（山ノ内町教育長）

指　導　永峰　光一（国学院大学文学部講師）

関　　孝一（長野県教育委員会文化課指導主事）

顧　問　金井喜久一郎（山ノ内町文化財専門委員長）

金井　汲次（中野市文化財専門委員長）

参　与　畔上　　儀（集団農区本郷地区整備組合組合長）

小林　繁男（山ノ内町役場農政課長）

畔上　　正（集団農区本郷地区整備組合工事委員長）

畔上　重芳（本郷区長）

事務局　田中　　満（山ノ内町教育委員会事務局長）（現教育長）

坂口　孝雄（山ノ内町教育委員会社会教育係長）（現同和教育係長）

（調査団）

団　長　田川　幸生（中野市平野小学校教諭）（現山ノ内東小教諭）

主　任　畔上　秀雄（山ノ内町文化財調査員）

檀原　長則（中野市文化財調査員）

調査員　池田　実男（中野市文化財調査員）

山上　右八（山ノ内町文化財調査員）

滝沢善次郎（山ノ内町教育委員会施設係長）（現農政課長）

金井　正三（須坂市教育委員会）

金井　晴美（須坂市）

荒井　　宏（長野大学 学生）

調査協力　高橋　　桂（飯山北高教諭）

松沢　芳宏（日伸精機社員）

望月　静雄（飯山市教育委員会）

阿部　与一（山ノ内町平穏農協）

布施谷写真館

山ノ内町役場農政課耕地係

中村賢一・吉池茂敏・徳竹章彦・黒岩きく代

㈱施工管理設計事務所（所長畔上格）

本郷区・集団農区本郷地区整備組合

山ノ内町西小学校

（発掘調査参加者）

畔上たけ子・小島博士・小林みよし・池田奉子・畔上つねじ・畔上国義・宮本れい・杉山久松・大塚光子・湯本ひろ子・丸山正子・小野沢しげ子・中島宏治・大塚すみ江・中島孝則・小林千代子・池田重信・池田律子・池田弘正・田村みさお・池田まさ子・畔上きよ江・畔上よし子・佐藤弥一郎・畔上博至・大塚ひろ子・小渕よしの・小林まさ子・下田義明・畔上光弘・畔上あさ子・湯本秀雄・湯本義男・中山慶十郎・桜井和彦・市川昭平・佐藤和彦・坂口ハル子・斉藤むめ・小坂忠子・池田昭一・柳沢定正・山上命子・山岸さつき・小松順子・山岸大清・山岸哲・小松きの・新井基之・山上昌広・山口もも江・横沢武文・小野沢とも江・関武・宮沢一夫・畠山健一・畔上文恵・畔上広幸・畔上耕児・常田いとじ・畔上ちよし・小松重幸・大塚しず子・仲俣修

（遺物整理参加者）

中村よね・小林春江・田川みき・小林かず子・牧野正子・井出きみ子・北沢勝実・塚本智恵子・荒井よしゑ・檀原千香子・山崎容子・伊藤雄子・小林葉子・高野秀子・田川千恵子・高見沢俊江・涌田豊子・湯本由美子・石田優・子・小坂まゆみ・村上順子・中村美佐江・山口久子・関修子・阿部ヒロミ・宮入はる美・増田郁子・横田順子・小松みゆき・山岸智子・笠原麗子・清水みや子・坂口千恵子・高見沢由美　（順不同敬称略）

△発掘調査のメンバー

△調査会役員の遺跡の視察

△バックホーによる埋立作業

△遺跡の測量をする調査団員

△指導者永峰講師による講話
（遺跡隣りの豊受社にて）

山ノ内町夜間瀬

伊　勢　宮

昭和56年3月30日

編集　伊勢宮遺跡調査団
田川幸生・畔上秀雄・檀原長則

発行　山ノ内町教育委員会
長野県下高井郡山ノ内町大字平穏3352－1

印刷　北信ローカル社
中野市三好町1－3－10